

平家物語
と
謡曲



まえがき

NHKの「炎たつ」を孫と見ていたとき、孫がなぜ義経が平泉へ行ったのだと言う話から、謡に色々義経が出てくるよと「橋弁慶」の謡の本を見せて話したところ面白そうだと言うので、丁度学校で「平家物語」を習っているので、『能に出てくる源義経』を書いてやり、そのとき、まったく久し振りで平家物語を読んだのです。学生以来何十年ぶりに読んだ平家物語は、あゝこは謡であの曲だ、こんな話とその背景にあったのかと、非常に面白く、それを書いてみようと、孫を対象と考えました。しかし、よく考えると、謡曲一曲づつについて、ある程度のことは知っています、その前後のこゝとなど、なぜ、この曲がと思うようなことがあります。例へば、威陽宮がなぜ出るのか、祇王、仏御前が最後はどうなるのか、木曾義仲と最後の巴のその後、その他謡曲にはないことや、梶原景時の謡言は福島逆櫓とされていますが、それ以外に二人の静いなどが物語にありません。

謡と平家物語と全く同じ文章を使われていたりしますが、それ以外の言葉では表現が出来ないほど、美しい文章に出会ったり、七五調の叙情詩調のよさ、読めば読むほど面白くなり、孫を対象としないで、自分の謡の勉強のひとつとして書き始めました。謡仲間、平家物語の中から三十余曲が謡われていると話し、話しました。そんなにあるのか、出来上がれば是非欲しいと言われ、非常に励みになり、作りました。作りあがつたものの善し悪しよりも、謡曲の文章の良さがしみじみと分かりました。

※威陽宮 かんようきやう

※謙言 さんげん
※静い いさかい

平家物語と謡曲 目次

俊寛 (しゅんかん)	………	一
祇王 (妓王) 仏原 (きわら・ほとけのはら)	………	九
頼政 (よりまさ)	………	十九
鶴 (つる)	………	廿六
驚 (おどろ)	………	三十三
威陽宮 (かんようきやう)	………	卅二
小督 (こくわ)	………	卅七
木曾 (きぞう)	………	四二
実盛 (みねもり)	………	四七
巴・兼平 (ともえ・かねひら)	………	五三
熊度・俊成 (くまど・しゅんせい)	………	六三
忠度 (ただのり・しゅんせい)	………	六六
教盛・生田 (きょうせい・なうた)	………	七一
經正 (つねまさ)	………	七五
通知 (ともあき)	………	七八
通盛 (みちもり)	………	八五
千手 (せんじゆ)	………	八八
熊野 (くまの)	………	九四
藤戸 (ふじと)	………	九九
屋島 (やしま)	………	一〇〇
景清 (かげきよ)	………	一〇四
待 (まち)	………	一〇八

碓 (いかりかすき)	………	一一九
大原御幸 (おほはらごきやう)	………	一二五
正尊 (しょうそん)	………	一三一
船井慶 (ふなべんけい)	………	一三六
忠信・吉野 (ただのぶ・よしの)	………	一四〇
二人静 (ふたりしずか)	………	一四一
三曲 (さんきよく)	………	一四五
阿古屋の松 (あこやのまつ)	………	一四七

付記

- ① 歴代天皇名・年号
- ② 年代表
- ③ 日本旧国名地図
- ④ 平氏系図
- ⑤ 源氏系図

平家物語と謡曲

俊寛

謡本には、平家物語卷二「足摺あしづりの事」に據よったものであると書いてあります。「足摺あしづりの事」は卷三です。

「御産ごうの巻まきの事」に同じき十一月十二日の寅とらの刻より、中宮御産なかつくみごうの氣きましますとて（中略）先例も、女後、后、御産ごうの時に臨たんで大赦たいしやくありき、大治二年九月一日の日、待賢門院御産ごうの時、大赦行はるゝ事あり。今度もその例とて、非常の大赦行なわれて、重科やふからの輩やう多く赦ゆるされける中に、この俊寛僧都一人、赦免しやくめんなかりける事こそうたてけれとあります。

さて【あはれ都しつこに在りし時は、法勝寺じやうしやうじ法成寺じやうめいじ】とありますが、俊寛は法勝寺の執行しつこうでした。その頃の叙位じょゐ、徐目じよめくは院や主上のお考かうえによらず、全く平家の専断せんたんになっているなど平家は横暴やうぼうでありました。それで平家滅亡の計りごとを東山の麓ふもとの鹿谷しかのたにという俊寛の山荘で行

※治承二年（一一七二）
※建礼門院
當時は中宮であつた。

※大赦による許し

なわれていました。この山莊はうしろは三井寺までつゞく要害無比

じょうやく

の城郭であつたとあります。ある夜、御白河法皇も御幸なつたとき、

※大納言

成親が前に合つた瓶子を倒しました。法皇がどうしたことかと言わ

※へいし

れたとき、大納言が「平氏が倒れました」と答へたので法皇ご機嫌

よく、誰か猿楽を舞えといわれ、平判官康頼が「ああ、あまりに

※あまがく

瓶子（平氏）が多く候ゆえ、酔いて候」と云うと、俊寛が「さてそ

の瓶子をいかがいたさん」と、つゞけて西光法師が「たゞ首を取る

にはしかじ」と立って、瓶子の首を割ってしまったとあります。

俊寛の祖父はひどく根性の曲がつた人であつたそうで、俊寛も僧の

身ながら、気性もただけしく傲慢であつたと書かれています。

※ごうまん

成親大納言は、山門の騒ぎ（※喧嘩）で、平家転覆の陰謀をいちじ押さ

※てんぷく

※いんぼう

へていた、そも内議支度は様々なりしかども、擬勢ばかりで、この

※い

※ぎせい

謀反叶ふべしとも見えざりければ、多田の蔵人行綱、この事無益な

※かな

りと思ふ心や付きにけん、つらつら平家の繁盛する有様を見るに、

（巻一）
鹿の谷の事

※銚子：お酒を入
るもの

12月1日
「俵たつ」で演じていま
した

※内相談や準備
※みせかけばかり

當時たやすう傾かたむけ難し、もしこの事漏れぬ程ならば、行綱まず失はれんなんず、他人の口より漏れぬ先に返り忠して、命生いのちかうと思ふ心ぞ付にける。ということで清盛に告げたのです。

清盛は謀反に組した大勢のものを召し捕らへても胸がおさまらず、鎧兜を付けて「あの成親が謀反は事の数にも候はず、一向法皇の御結構※にて候ひけるぞや。しばし世を静めんまで法皇をば、鳥羽の北殿へ還うしまいらするか、しからずば、これへまれ御辛をなし参らせんと思ふはいかに」というと、重盛そのとき、はらはらと涙を流して「御運も早末になりぬと覚え候。人の運命の傾かんとては、必ず悪事を思ひ立ち候なり」……平家がこゝまで栄えたことはみな君のお陰である、君も必ず考え直されるだろうし、道理と非道を比べれば、道理につくのが当然だと諫めます。清盛は重盛と仲たがえしては具合が悪いと思ひ止まります。

成親大納言のほか、処罰をされたものは数少なくなはなく、俊寛、丹

※御企み

波の少将成経、平判官康頼は薩摩瀉の鬼界島へ流されます。※

丹波の少将成経、平判官康頼は島で、毎日山所権現に参り祈念して
いました。そして康頼は次のような和歌を読みます。※

薩摩瀉沖の小島にわれありと 親には告げよ八重の潮風

思ひやれしそとばしと思ふ旅だにも なほふるさとは恋しきものを

これを卒都婆そとに書き、海へ流したが、その一つが、安芸の厳島神社
に流れつき、ある僧が都へ届け、それが重盛から清盛に見せられた。

入道も、木石ならねば、さすがあはれにこそと宣ひけれとあります。

一番初めに書いたように、中宮の慶事けいじのため大赦が行なわれること
になります。俊寛については、清盛は「俊寛はこの入道がひとし
お目に掛けていた男である、所もあろうにしかるに、おのれが山莊
に寄り合して、奇怪きかいなる振舞ふるまいをなすとはなにかと許さなかつ
たとあります。

これより先は平家物語巻三「足摺あしずりの事」に

※硫黄島

佐多岬より南250軒

※謡では

三熊野

※平教盛の領地肥前肥前の國から
衣食を送られ歸命をつない
だ。

成経康頼は熊野権現に心厚く
この島に三所権現を奉らうと
したが、俊寛不信弟にて
これを用いずとある
那智の山に似たところを
那智の御山とし毎日二人
は三所権現参りをした

『俊寛と云う文字はなし、禮紙らいしにやあるらんと』か『我等三人は同じ罪、配所も同じ所なり』『平家の思ひ忘れかや、執筆の筆の誤りか』と書かれています。が、謡曲の「俊寛」のクセに「前に読みたる巻物を、また引き披き同じ跡を、繰り返し繰り返し、見れども見れどもたゞ成経康頼と、書きたるその名ばかりなり、もしも礼紙にやあるらんと巻き返してみれども、僧都とも俊寛とも書ける文字は更に無しこは夢かさてもゆめならば覚めよ覚めよと現なき俊寛が有様を見るこそ哀れなりけれ」と謡はれ一つの見処です。

その後、謡曲では、成経康頼が赦免しゃめん舟に乗るのですが、『僧都も舟に乗らんとて、康頼の袂に取りつけば、僧都は船に叶うまじと、さも荒けなく云ひければ、うたてやな公の私おふけと云うことのあれば、せめては向かいの地までなりとも、情に乗せてたび給へ、情を知らぬ舟子ども櫓ともづなを振り上げ打たんとす、さすが命の悲しさに、また立ち返り出船の、櫓に取りつき引きとむる、舟人櫓押しきって、舟を

深みに押し出だす、せん方波に揺られながら、たゞ手を合わせて舟のなり、舟よと言えば乗せざれば、力及ばず俊寛は、もとの渚にひれ伏して……声も惜しまず泣き居たり』と謡曲では一番の劇的な表現としていりますが、平家物語では、『すでに纜解ともすないて舟を押し出せば、僧都は綱に取り付き、腰になり、脇になり、丈の立つまで引かれ出づ。丈も及ばずなりければ、舟に取り付き「さていかに、おのおの、俊寛をばついに捨て果て給ふか。許されなければせめては九国の国まで」とくどかれければ、「いかに、叶かなひ候まじ」とて取り付き給ひつる手を引き退けて、……せんかたなさに、渚なづきに上がり倒れ伏し、喚めき叫び給へども、漕ぎ行く舟の跡白波ばかりなりとあります。

そして舟も漕ぎ隠れ、日も暮るれども、僧都あやしの臥所ふしどへも帰らず、波に足うち洗はせ、露にしおれて、その夜はそこに明かしける、その瀬に身を投げざりし心の中こそはかなけれとこの項はむすんでいます。

さてその後、俊寛はどうなったのでしょうか。僧都の幼うより不便に

して召し使はれける童あり。名をば有王と申しける。僧都の御娘の

忍うでおわしける所へ参りて、「今はいかにしてもかの島へ渡りて、

御行方をも尋ね参らせばやと存じ候。御文賜はって参り候はん」と

娘御の文を持ち、薩摩へ下り、かの島へ渡る船津で、人に怪しまれ、

着物を剥ぎ取られしたが、姫君の手紙だけは、もと結いに隠し島へ

渡った。都でうすうす聞いた話どころでなく、田も畑も村もない言

葉も通じないところであった。尋ねあるいたが、「あそこよこよよ

とまよひ歩きしが、その後は行方をも知らず」という事であった。

ある朝、磯の方より蜻蛉とんぼなんどの如くやせ衰へたる者、よろぼひい

出たり。都にて多くの乞がい人は見しかども、かゝる者はいまだ見

ず、我餓鬼道＊＊＊がきどうなどへ迷ひきたるかと思ふ。もしかもしか御行く方

を知ったるかたずぬ。「これこそそれよ」と手に持てるものを投

げ捨て、砂の上にぞ倒れ臥すと、そこで有王は初めて主人の行方を

＊一じき

＊餓鬼道で苦しむ亡者

知ったのです。「ひとまず我が家へ」という事で、有王は俊寛を背に負い、松の木が一むらはえているなかに、竹を柱に、葦を束ねて梁のかわりに渡し、上にも下にも松の葉をぎっしり詰めてあるだけの小屋でとうてい雨風を防げそうに見えなかった。昔、法勝寺の執行のときは、八十余ヶ寺の莊園をしやうゐん司り、棟門、平門の中で四、五百人の従者けんせき華族に囲まれ、信者の布施をうけながら、修業をつとめなかった信施無慚しんしむざんの罪によって、早くもこの世でその報いを受けておられるのかと思うのであった。

有王は奥方が苦勞され、三月二日に亡くなったことや、姫君の手紙を見せました。俊寛は「この上は生きながらへても、皆に苦勞さすばかりだ、それも情け知らずと言うものだ」と、みずから絶食し、ひたすら阿弥陀仏を唱へ、臨終にも心を乱さず生涯を閉じました。年三十七才でありました。

※信者からの
布施を受け
ながらみづ
から反省し
ないこと

祇王^{ぎおう}（妓王） 仏原^{ほとけのむら}（巻一 祇王のこと）

『祇王』は宝生流、金剛流のみ、『仏原』は観世流、金春流のみで喜多流はいづれも現行曲としてはない。シテは『祇王』も『仏原』も仏御前である。『祇王』ではツレが祇王として出てくる。

さて清盛は、仁安二年十一月十一日、五十一歳で病におかされ、命ながらえるために、出家入道して、淨海^{じやうかい}と名のつた。その効験^{こうけん}か、宿痾^{しゆくゝゐ}たちまち癒^いえた。出家したのちも榮耀^{えいよう}はなお尽きず、吹く風が草木をなびかすように、また降る雨がくまなく国土をうるおすがごとくに、だれひとりとして清盛を仰ぎ敬わないものとなかった。かく天下^{しやうてん}を掌中^{しやうちゆう}におさめた清盛には、世のそしりをもはばかりず、人のあざけりをもかえりみぬ、奇怪^{きがい}な行ないが多かった。

当時、都に名の聞こえた白拍子^{しろびやうし}の名手で、祇王、祇女という姉妹がいた。その祇王を清盛は寵愛^{ちゆうあい}した。『祇王』の曲のクセに『こゝに平相国、清盛の朝臣^{あそん}とて、今の世の武將たり、たれかは恐れざるべ

※持病

き、金玉玉殿に、美女の数を集めては、漢宮四臺もこれにはいかで

勝るべき。中に祇王は好色の。その名にめでゝ参殿の。初めよりも

色深く。比翼連理のその契り』と謡っている。

そもそも我が朝に白拍子の始まったのは、鳥羽院の御代に、島の千歳・和歌の前なる二人が舞ったのが始めてである。当初は、水干に

立烏帽子、白鞘巻を差して舞い、男舞と言われた。ところがしばらく

くたつと烏帽子と刀を廃し、水干だけとなった、それゆえに白拍子の名を得た。このことは祇王の能の『間狂言』でも喋りがある。

京中の白拍子は、祇王をうらやむものあり、そねむものあり、また祇の字をつけてあやかろうとした。

かくて三年というに、また、白拍子の上手一人出でたり、加賀の国の仏とぞ申しける。年十六とぞ聞こえし。京の人はみな、多くの白拍子を見たが、これ程の上手な舞いを見たことがないと、しきりにもてはやした。仏御前はあるとき、

漢の王宮

美人

男女の契りの
深いことをい
う

「われ天下にもてあそばるゝと云えども、当時めでたう栄えさせ給ふ平家太政の入道殿へ、召されぬことこそ本意なけれ。遊物の習ひ、何か苦しかるべき。推参してみん」と、西八条の清盛の邸へ伺った。取り次ぎの者の言上を聞き、清盛は氣色をそこねて

「何だ、さような遊び女は人様に召されて参るものだ。その上祇王のおるところに、仏であろうが神であろうが許しはせぬ。とっとと帰れ」と云われ、仏御前はやむなく帰りかけたが、祇王のとりなしで、それでは、とにかく今様でも一つ歌ってみよ、ということになつた。

能の『祇王』では、入道に仕える瀬尾三郎という者に、仏御前が清盛に会いたいと頼む、じょうかい『浄海の御誕には、いかなる神なりとも仏なりとも、祇王があらんほどは御対面かのふまじき由仰せ候処に

祇王の御申しには、いづれも流れをたつるは同じことにて候へば、

なくてはか。叶ふまじき由たつて御申し候ひて、この四五日は出仕をとめ給ひて候』それで清盛は、仏御前に会うことゝしたので、瀬尾

※今様：新たに
流行り出した
歌

三郎が祇王と仏御前を迎えにゆく。能では、それから二人で清盛の前で相舞することになる。舞は中之舞である。

舞がおわり、更に仏御前一人で舞えと言われる。祇王は「わらははこゝにいても由なし」と家へ帰ろうとすが、瀬尾に、それでは浄海殿の機嫌もいかゞかと」止められる。

仏御前はみめかたち美しく、声もよく、節回しも巧みな名妓、舞もきたいにまざる出来栄えだったから、清盛は心を奪われたちまち仏御前に情を移した。

『仏原』では『昔平相国の御時、妓王妓女仏刀とじ自とて、温顔舞曲花めきて、世上に名を得し遊女ありしに。始めは妓王を召し置かれて遊舞の寵愛甚だしくて、色香を飾る玉衣の、袖の白露起臥の。御簾の内を立ち去らで、さながら宮女のごとくなり、思はざる折を得て、仏御前を召されしより、御心移りて何時しかに妓王は出され参らせて、世を秋風の、音更けて、涙の雨も、をやみもせず』謡っている。

仏御前は、

「もともと私はお召しもないのに参上したもの。祇王御前のおとりなしで召し戻されたものを……早々においとまをお願いもうしとう存じます」

「そのようなことはまかりならぬ。祇王にはばかって申すのか。その儀ならば、祇王にこそ暇をつかわす」と祇王は立ち去れとせかれるまゝに、三年も住み慣れたところだけに名残惜しく、襖障子に萌え出づるも枯るるも同じ野辺の草

いづれか秋にあはではつべき

と書き残し家に帰った。

この年も暮れ、あくる年の春を迎えた頃、入道相国より

「いかに祇王、その後はどのように過ごしているか、仏御前があまり所在なげに見ゆるゆえ、屋敷へ参って仏の伽を勤めるように」と使いをよこした。母の刀自のせつなるすすめもあり、つらい出仕を

した。しかも清盛が「仏御前を慰めるため、今様を歌へ」という。
落ちる涙をおさへ、

仏も昔は凡夫なり 我らも遂には仏なり

いづれも仏性具せる身を 知らざりけるこそあわれなれ

と泣く泣く歌った。座に連なる平家の一門公卿、殿上人、諸大夫、
みな感涙を催した。

祇王は二十一歳で尼になり、嵯峨の奥の庵で、念仏を唱え暮らすよ
うになった。祇女も、母の刀目も念仏三昧さんまいの生活をおくることになっ
た。

かくて春過ぎ夏たけぬ。秋の初風吹ぬれば、星合いの空を眺めつ
つ、天のとわたる梶の葉に、思ふ事書く頃なれや。夕日の影の西
山のはにかくるを見ても「日の入り給ふところは、西方浄土に
てあんなり。いつかわれらもかしこに生まれて、物を思はで、す
ぐさむらん」と、かかるにつけても過ぎにしかたのうき事ども、

思ひつづて唯つきせぬものは涙なり。たそかれ時も過ぎぬれば、

竹の編戸あんどを閉ぢふさぎ、灯かすかにかきたてて、親子三人念仏し

ていたるところに、竹の編戸をほとほとうちたたく者出て来た

り。この文はこの項の聞かせ所である。とくに「かくて春過ぎ夏

たけて以下の七・五調は日本の叙情詩の主張を形作ってきた。

前にあるように、この庵の編戸をほとほとたたく者があった。

こわごとをあけると思いがけず、仏御前であつた。「これはと」

声をかけると仏御前は、

「もともと私は、みずから屋敷へ推参し、あなた様のおとりなしで

召され、しかも代わりに私があとにとめられたことの恥ずかしさ、

身のつらさ。これを見るにつけても、いつかはまたわが上にめぐり

来ることと思われ、あなたが襖障子に『いづれか秋にあはで果つべ

き』と書きおかれたお言葉、心にひしと感じております。いつぞや

あなたが屋敷に召されて、今様をお歌いなされたとき、つくづくと

うかれ女の身のつらさを、思い知らされました。このほど噂で母子三人様、ご一緒に念仏されている由、聞くにつけてもうらやましく、いとまを願いましたが、入道殿お許しになりませぬ。この世の栄華は夢のうち、いちじの栄華を誇って、後生知らずと言われんも悲しく、今朝ひそかに屋形をぬけだして、このような姿になって参りました」と被っていた衣をとりけると、緑のかみをそり落として、尼の姿となっていた。そして

「このように姿を変えて参りましたからは、これ迄の罪をお許し下され、共に念仏しんぶつ称名し、一つの蓮＊の身となりたく、お許しなくば、いつ地へか迷い行き、いかならん苔のむしろ、松の根にも倒れ伏し、命あらんかぎり念仏して往生の本懐を遂げたく、心をきわめて参りました」とさめざめとかきくどきました。祇王は涙をおさえて、

「かほどまでに思い立たれたとは夢にも知らず、浮き世の定めと身の不運とあきらめればよいものを、ともすればあなた様のことを恨めしく存じました。今は恨みもなく、わずか十七歳の身で穢土をい

＊極楽の蓮の上に乗る身

＊この世
浄土反対

※人間として
真の心

とい、浄土を願おうと思ひ定められたのは、真実の大道心、まことの善知識と申しましよう、ともに心を会わせて、極楽往生を祈ろうではありませんか」と、四人はそれよりおなじ庵に暮らし、一心不乱に浄土を祈りました。御白河法皇御創建の長講堂の過去帳に「祇王、祇所、刀自らが尊霊」と四人一緒に書き収められている。

『仏原』のクセの上羽あけはに『思おもいの外なる仏御前の、様を変へ来たりたり、こはそもさるにても斯かく捨すつる身となりぬれど、なおも御身の怨うらめしさの、執心は残るにそもかゝる心持つ人かや。今こそ真の、仏にてましませとて、妓王は手を合わせ感涙を流すばかりなり』と謡っている。

平家物語の盛者必衰の思想をこの祇王物語でも、つらぬいている。

『祇王』は華やかさを謡い、『仏原』は物語の後半の妓王、仏の極楽往生の願いを謡っていると思われる。その華やかさを『祇王』は中之舞を舞い、『仏原』哀れさを序の舞で舞うという違いもある。

「平家物語」（杉浦明平記より）

鎌倉時代中頃より「平家物語」はかなりひろく流行していたようだが、それは文字に書かれた本として普及したのではなく、盲法師が琵琶を弾き語りして伝わったと言われている。言葉にはある程度のリズムを付けることで、聴手に快感を与える。平家物語にはそういう語りもの特有の性格が今も残っている。

原作者は、はっきり分かってない。「徒然草」によると、御鳥羽院のとき、信濃前司行長というものがつくって、生仏という盲法師に教えて語らせたということになっている。

ところがこの信濃前司行長は出家してから天台座主の慈鎮の扶持を受けていたと言う以外に素性も伝記もさっぱり分かっていないということだ。

頼政

平家物語巻四「源氏揃へ」に、御白河法皇の第二皇子、以仁親王は御母は加賀大納言季成郷の御むすめであり、三条高倉にましましてれば、高倉の宮と申しけり。御年十五にてひそかに御元服あり。

故建春門院のねそみを受け、世に出ることなく治承四年、御年三十になられた。源三位頼政がある夜密かにこの以仁王をたずね「あなた様は本来東宮にも立ち、天位にも即かせ給うべかりし人の、三十まで宮にて渡らせ給うこと、残念とは思し召され候はずや、はや御謀反を起こさせ給ひて、平家を亡ぼし、いつまでも鳥羽殿におし籠め給はせられる法皇の御憤りを安めらせ参らせるは、ひとえに御孝行の至りにて候はんずれ、もし思し召し立たせ給ひて、令旨を下され給ふものならば、悦び馳せ参らんずる源氏どもこそ、国々に多く候へ」と申し上げた。宮は即座には心を決められかねたが、相少納言という人相見が、「位に即かせ給ふべき御相まします」という。

※人相

頼政のすゝめもあり、令旨伝達の使者を東国へ下され、また、美濃
尾張の源氏にも触れ、五月十日伊豆の北条蛭ヶ小島に着き、流人の
前右衛佐殿にも伝えた。また木曾の義仲へもと中仙道に赴むかせた。
こゝに熊野の別当堪増は平家の重恩を受けていたが、どこからかこ
のことを聞いた。

※頼朝

さて同月十三日、宗盛は清盛に法皇のことをたびたび申ししたので、
法皇を都の八条烏丸美福院の御所へ御幸を仰いだ。こうしていると
ころへ熊野の別当堪増から飛脚で高倉宮が謀反を企てて軍を起こす
ことを知らせてきた。清盛はひどく怒り「高倉宮を土佐へ流せ」と
三条大納言実房や源大夫判官らに命じた。この源大夫判官は三位入
道源頼行の三男であるといふことは、頼政が謀反をすゝめた事をま
だ知らないのである。

五月十五日高倉宮へ頼政から「宮さまの御謀反は、もはや、事あら
われました。急ぎ三井寺へ入らせおわしませ」と連絡があった。翌

十六日、高倉宮が謀反を起こされて、三井寺へ行かせ給うたと、噂が伝わるや、都じゅうの騒動はひと通りでなかった。同じ十六日の夜、頼政も三井寺に入った。

三井寺では法螺貝を吹きならし、寺内の僧侶大衆を集め評議し、観山と奈良へ回状を送った。「山門は心変わりした。奈良興福寺はまだ来ない。ぐずついていると悪い結果になると、六波羅へ夜討しようとしたが、六波羅には軍兵数万騎がはせ参じていたので、二十三日明け方奈良へ落ちようとした。

謡曲では「頼政」のサシ、クセで「そもそも治承の夏の頃、よしなき御謀反を勧め申し、名も高倉の宮のうち、雲井の外に有明の月の都を忍び出で、浮き時しにも近江路や、三井寺さして落ちたまふ。去る程に、平家は時を廻らさず、数万騎の兵を、関の東に遣わすと、聞くや音羽の山続く、山科の里近き、木幡の関を外に見て、ここぞ浮き世の旅ごころ、宇治の川橋うち渡り、大和路さして急ぎしに」

※観山のこと

というところです。

【寺と宇治との間に、関路の駒の隙もなく、宮は六度まで御落馬にて、煩はせ給ひけり、これは前の夜御寝ならざる故なりとて、平等院にして、しばらく御座を構へつゝ、宇治橋の中の間に、引き離すには川波、上に立つも、共に白旗をなびかして寄する敵を待ち居たり】と謡ふが、平家物語でも、その通り書いてある。

「去る程に、宮は宇治と寺の間に、六度まで御落馬ありけり。これは去んぬる夜御寝ならざる故なりとて、宇治橋三間引きはなし」とあります。六波羅は知盛を大將軍にして、二万八千余騎木幡山うち越えて、宇治の橋にぞ押し寄せたる。

さてシテの語で【さるほどに源平の兵、宇治川の南北の岸にうち臨み、関の声矢叫びの音、波にたぐへて夥し、橋の行桁を隔てゝ戦う味方には簡井の淨妙・米法師、敵味方の目を驚かす】のくだりは、

簡井の淨妙明秀は黒革織の鎧を着て五枚兜の緒をしめ、黒塗りの太

刀を佩き、二十四さしたる黒母衣はろの矢を負い、塗籠藤ぬりごもどうの弓に好みの

白柄の大長刀をとって、ただ一人、橋の上を進んだ。橋の行桁ゆきげたを一

条二条の大路を走るとく渡り、大長刀をふるった。また、一来法

師という大力の剛の者が、淨妙のうしろに続いて戦ったが、橋桁は

狭い、淨妙をおしのけて前へ出て戦った。一来法師は討ち死にした。

下野の国の住人、足利又太郎忠綱は「ただいまこの渡りを渡らざれ

ば、長く弓矢の名折れなるべし、よし水に溺れて死なば死ね、いざ

渡らん」と真っ先かけて馬を乗り入れた。そして大音声にて「弱い

馬は下手に立てよ、強い馬を上手になせ。馬足のとどく間は、手綱

をゆるめて歩ませよ、馬はずまば、手綱をかきくって泳がせよ、水

に流さるものは弓の弭はずに取つかせ、手に手を組み、肩をならべて渡

れ。馬の頭沈まば、引き揚げよ、さりとて引き過ぎてかぶるな。鞍くら

壺つぼによく乗り、しっかりと鎧を踏め、水のとどこおりしときは、三頭

の上に乗り掛かれ、川中で弓を引くな、敵が射ても応ずるな、つね

※矢を二十四本
持つこと

に鐵しころを傾かたけておれ、真まっ直ちかぐに渡わたって押し流ながされるな」と三百余騎の軍兵が一騎も流されず、向むかう岸へさつと渡り上がった。

謡曲では【さすが難所なんしょの大川たいがなれば、左右そうりうなり渡すべき様もなかつし処ところに、田原の又太郎忠綱と名のつて、宇治川の先陣我れなりと名のりもあへず三百余騎、くつばみ揃へ川水に、少しもためらはず、群むられいる群鳥むらどりの翼よくを並ならぶる羽音うねもかくやと、白波にざつざつとうち入れて、浮うきぬ沈しづみぬ渡しけり、忠綱、兵を下知していわく、水の逆巻さかまきくところをば、岩ありと知るべし、弱よき馬うまをば下手に立てゝ、強つよきに水を防がせよ、流れん武者には弓ゆ筈はずを取らせ、互たがひいに力を合はすべしと、ただ一人の下知によつて、さばかりの大川なれども一騎も流れず此方の岸に喚こゑめいて上あがれば味方の勢は、踏ふもためず、半町ばかり、覺おぼえず退しりぞつて切先をそろへ此所を最期と戦うたり」と謡っています。後シテので【伊勢武者は、みな緋緘ひせきの鎧よろい著きて、宇治の網代に、かゝりけるかな】と謡うのは、伊賀、伊勢の両国の官兵

は馬筏にもろ押し破られて、六百余騎が流された。萌黄もえぎ、緋緘ひおどし、赤緘
いろいろの鎧が浮き沈みつゆられゆくさまは、神南備山かみなびやまの紅葉葉の、
峰の嵐に吹き誘われて、竜田川の秋の暮れ、堰いせきにつかえて流れはて
ぬに異ならず。その中に緋緘の鎧を着た武者三人、網代にかゝつて
浮き沈みながらゆられているのを見て、伊豆守仲綱が先の歌を詠み
ました。頼政は、左の膝頭を射られて重傷を負いました。兄弟の、
伊豆守仲綱も次男源大夫兼綱も討死にし、自害しようと「埋木の、
花咲くこともなかりしに、身のなるはてぞかなしき」と読み、自害
しました。宮も一本の矢に当たり、ご落命されました。

鵺

（平家物語の「ぬえ」という字は鵺と言う字ですが、

J I S 水準漢字にはありません）

源三位頼政は摂津守頼光の五代目、三河守頼綱の孫、兵庫頭仲政の子です。およそ三十年前にあたる近衛天皇時代の仁平の頃、主上夜ごとに怯えられることがあった。大法、秘法といった修法を行なわれたがその効果がない。主上のお悩みは丑の剋、東三条の方角から一むらの黒雲が御殿の屋根に覆い被ると、主上の怯えが始まる。

むかし堀川天皇の時代、同じく天皇が夜な夜な怯えられることがあった。時の將軍源の義家は、紫宸殿の広縁に祇候して、御悩の刻限がくると、弓の弦を三度ひき鳴らし、大音声をあげて「前陸奥守源義家」と呼ばわると、人々はその声に身の毛の総立つ感じがしたが主上のお悩みもやんだ。このような先例にならない、武士に命じて警護させることになり、頼政がえらばれた。

謡曲には【これは近衛の院の御宇に、頼政が矢先にかゝり、命を失

※ほらしん

ひし鶴と申しゝ者の亡心にて候。その時の有様くわしく語って聞か

※亡者

せ申し候べし」そして「さても近衛の院のご在位るとき、仁平の頃

ほひ、主上夜な夜な御悩ごなやあり、有驗の高僧貴僧に仰せて、大法を修

せられけれども、そのしるし更になし、御悩は丑の刻ばかりにてあ

りけるが、東三条の森の方より、黒雲一むら立ち来って、御殿の上

に蔽へば必ず怯え給ひけり、すなわち公郷くけ食議せんぎあつて、定めて変化

の者なるべし、武士に仰せて警固あるべしとて、源平両家の兵を選

ぜられる程に、頼政を選み出されたり、頼政はその時は、兵庫の

頭とぞ申しける、頼みたる郎等には、猪いの早太はやた、唯一人召し具した

り、我が身は二重の狩衣に山鳥の尾にて短はいだりける、尖矢とがりや二筋滋

藤の弓に取り添へて、御殿の大床に祇候しきして、御悩の刻限を今や今

やと待ち居たり、さる程に案の如く、黒雲一むら立ち来たり、御殿

の上に蔽ひたり、頼政きつと見上ぐれば、雲中に、怪しき者の姿あ

り、矢取って打ち番つがひ、南無八幡大菩薩と心中に祈念して、ひっ引

※滋藤の弓

(しげとう)

弓の柄に藤
を巻いたも
の

きひやうと放つ矢に、手応へしてはたと当たる、得たりやおうと矢
叫びして、落つるところを猪の早太、つゝと寄りて続けさまに、九
刀ぞ刺したりける、さて火を灯しよく見れば、頭は猿、尾は蛇、足
手は虎の如くにて、鳴く声鶴に、似たりけり、恐ろしな^{おろ}んども疎^{おろ}か
なる形なりけり】又【その時主上御感あつて、獅子丸という御剣を
頼政に下されけるを宇治の大臣給はりて、階を下り給ふに折節、郭^み
公訪れければ、取りあへず。一ほととぎす、名をも雲居に、掲ぐる
なか」………頼政右の膝をついて「弓張月の、いるにまかせて」
と謙遜^{けんそん}の意をあらはした。みな頼政の歌道にも優れているのに感心
した。鶴は【うつお舟に、押しいれられて、淀川の、淀みつ流れつ
行く末の】とあるように丸木舟に入れて流したとあります。謡曲は、
ほとんど平家物語の通りである。この物語は、近衛天皇の仁平（一一
五年）の頃であるが応保（一一二一年）二条天皇御在位のと^{とき}、鶴^{つる}（とらつぐと）と
いう怪鳥^なの皇居における啼き声がしばしば主上を悩ますことがあつ

※ほととぎす

た。先例によって、頼政をお召しになった。宵のうちに一声啼いたきり、後は声を立てない。闇夜であるし、姿かたちも見えない、どこを目当てに狙いをつけてよいか見当がつかない。頼政は策をめぐらせ、まず大鐃矢を内裏の屋上へはなった。鵠は鐃矢の音におどろいて空に飛び立ち、しばらくの間、声低く啼きさわぐ、それを目標に二の矢をとってつがい、ひゅうとばかりきつて放せばふっと手応えして、鵠は落ちてきた。という話ものっています。

※矢が飛ぶと大
きなうなりを
たてゝ飛ぶ矢

路馬ろば

(平家物語卷五)

なぜ平家物語に驚、咸陽宮かんようきうが出てくるのかと不思議に思った。よく読むと、治承四年九月二日相模さがらの国大庭三郎景親より早馬で頼朝が北条時政と兵を上げ、石橋山にたてこもつたが、景親が攻め、舟にて安房上総あわかつるへ逃れましたと言う注進があった。清盛の怒りはひととおりでなく「頼朝は、さんぬる平治元年十二月、父義朝が謀反なしたるにより、死罪に行こなうべきを、故池禪尼いけのぜんにがたつての命を請うこたるによって、流罪となしたるものである。その恩を忘れ弓をひくは、必ず天罰をこうむるであらう」また平家の中には頼朝は、咸陽宮の燕えんの太子の天も許さぬ計画と同じだから、燕の太子と同じ運命に落ちるであらうと云ったことによるのだろう。

我国の朝敵は、神武天皇の御代に紀州名草郡高雄村に土蜘蛛つものぐもがいた、官軍がさし向かって勅旨を申し伝えて殺した。それ以来朝威を滅ぼそうとした輩やからは、大石の山丸、大山王子、守谷の大臣、山田の石川

※咸陽宮
(かんようきう)
次の項で
でる

曾我の入鹿、大友の真鳥、……平の将門、藤原頼長、藤原信頼にいたるまでに十余人にのぼるが、一人として本懐を遂げたるものはない。

君の威光は絶対であると言ひ考えから「鷲」や「咸陽宮」の話が出てきたのではないかと推定します。平家物語「朝敵揃へ」にこの鷲が出てきます。

延喜年間えんぎの話であるが、醍醐天皇が神泉苑しんせんえんにお出になられたとき、池の辺に鷲がおるのを見らけると、六位の藏人に「あの鷲をとってまいれ」と仰せられた。飛ぶ鳥をどうして捕えることができようと思つたが、鷲に近づくと、鷲は羽ばたきしてまさに飛び立とうとする「宣旨じや」と六位が叫ぶと、鷲は地にすくみ伏して飛び立たない。御前へ持つてくると「朕ちんの意にしたがって参つたのは鳥ながら神妙いたりの至りである。五位にいたせ」と仰せられて、又、「今後は鷲の王たるべし」と記され首にかけてお放しになされた。実は、たゞ

王威のほどをおためしなされようととのためであつた。

謡曲では【^{ねら}覘いよりて岩間の陰より取らんとすれば、この驚驚き羽風を立てゝ、ぱつと上がれば力なく、手を空しうして、仰ぎつゝ走り行きて、汝よ聞け、勅諭ぞと呼ばはり掛くれば、この驚立ち帰つて本の方に飛び下り、羽を垂れ地に伏せば、抱き取り観覧みらんに入れ、げに忝き王威の恵み、ありがたや頼もしやと、皆人感じけり、……御感の餘り爵しやくを賜り、共になさるゝ五位の驚、さも嬉しげに立ち舞ふや……】とまず同じことを謡っている。

咸陽宮

支那の春秋戦国の頃、燕の皇太子の丹と言う者が、秦の始皇帝に捕われ、監禁されること十二年、丹太子が涙を流し「我故郷に老母あり、暇を賜り、今一度かれをみんな」とぞ歎きけり、始皇あざ笑つて「汝に暇賜はんこと、馬に角生ひ、鳥の頭の白くならんを待つべき

なり」とぞ宣ひける。燕丹、天仰ぎ地に伏して「願はくは、馬に角生い鳥の頭白くなしてたべ、今一度母をみん」と祈りける。冥顯みょうけんの

※三宝孝行の志を憐れみ給ふ事なれば、馬に角生ひて宮中に来たり、

鳥の頭白くなり庭前の木に住めりけり。始皇帝鳥頭馬角とうばかくの変に驚き、

綸言りんげん返らざることを信じ、丹を許し本国へ返しけり。なほ悔しみて、

秦しんと燕えんの国の境に、楚国こくといふ国あり。大きなる川流がれたり、か

の橋に渡せる橋を踏まば落つるやうにしたゝめて渡されたりければ、

真中にて落ち入りぬ。されども水にはちつとも溺れず、平地を行く

が如くにて、向かひの岸にぞ着きにける。これは亀が幾らと言う数

知らず水の上に浮かび来て、甲を並べて通しける。丹なほ恨みを含

んで、始皇帝に随はず。始皇、官軍を遣はして燕を滅さんとす。

燕丹は大いに恐れて、荊軻けいこという勇士を招き大将にした。樊於期はんよきと

いう者、始皇に父、伯父、兄弟を殺されて燕の国に逃げていた。始

皇は「樊於期の首を刎はねて差し出したものに賞金五百斤を与える」

※仏教で三つの

※天子の言葉

と布告していた。荊軻は樊於期のもとへゆき「我聞く、汝が頭五百斤の金に報ぜられたんなり。汝頭を我に借せ。とって始皇帝に奉らん。悦びて観覧※えいらんを経られんとき、剣を抜いて胸を刺さんは易かりなん」というと樊於期は「始皇帝をうつことができるなら、やさしいことです」とみずから首を切つて死にました。また、秦舞陽しんぶようという剛の者を道案内として秦の都へいった。

※天子が御覧になる

ここ迄が謡曲の「咸陽宮」の前提の話であります。謡曲に「そもそもこの咸陽宮と申すは、都の周り一万八千三百余里、内裏は地より三里高く、雲を凌しぎて築き上げて、鉄の築地方四十里、または高さも百余丈、雲路を渡る雁かりがねも、雁門がんもんなくては過ぎ難し、内に三十六宮あり、真珠の砂瑠璃いさごりの砂黄金の砂を地に敷き、帝の御殿は阿房あほう宮、銅の柱三十六丈東西九町、南北五町」と咸陽宮の大きさ、豪壮さを謡っている。これは平家物語と全く同じで、その後も終わりますと同じです。簡単に書きますが、荊軻と秦舞陽の二人は、秦の都へ

やってきました。そして燕の地図と樊於期の首を持参したと申し上げると、始皇は臣下に受取らせようとしたが「直々でないと渡せません」と断わると、それではと公式の儀礼で引見された。宮殿のさかんな威容に、秦舞陽は氣後れして震えた。皇帝の前に燕の地図と樊於期の首のはいった櫃を御覽にいった。櫃の底に氷のような劍が隠されている。始皇はそれに氣付き逃げようとした。荊軻はその袖をつかまへ、櫃のなかの劍をとり始皇の胸に突きに当てた。始皇は三千人の后を持っている、その中に花陽夫人という琴の名人がいた、その琴を聞きたいから少し暇をくれと言うので、琴を聞く、この所を謡曲では『花の春の琴曲』は、和風楽に柳花苑、柳花苑の鶯は同じ曲のさえずり、月の前の調めは夜寒を告ぐる秋風、雲居に渡れる雁がね、琴柱に落つる声々も涙の露の玉章、たまさかに人はよも白糸の、調めを改めて君聞けや、七尺の屏風は躍らば越えつべし、羅縠の袂をもひかばなどか、切れざらん、謀臣は有無に酔えり、群臣な

聖人の御助けとおしかえし、二三返の琴の音を君は聞こし召さるれども、荊軻は聞き知らでたゞ緩々と侵されて、眠れるが如くなり」と荊軻の心を緩んだ始皇は妃の引いた「七尺の屏風は躍らば越えつべしの意を悟られ、袖を引きちぎって柱の陰に身を隠した。荊軻も秦舞陽も討たれた。たゞ謡の最後は「秦の御代万歳を保ち給ふ事、たゞこれ後の琴の秘曲、ありがたかりける例かな」と終わっているが平家物語は「やがて軍を遣わして、燕丹を亡ぼさる、蒼天許し給はねば……君に弓をひけば頼朝も同じようになるだろう」という人があったと結んでいる。

小 叔 目

高倉天皇は、建礼門院の御所につとめていた女房の召使の少女を、お目につけられたが、世上の謗を憚られて少女を召されなくなった。そのためとかく御思案にせずみがちで、寝殿にばかり籠もっておられた。時の関白、藤原基房は「女子の身分を問題にされることはありません。何の不都合が御在ましよう、すぐにもこの基房の養女に致し、早速お召しになるが宜しかろう」と申し上げが、御承知されなかった。その少女は顔をあからめて「なんとなく氣分のわるような心地がいたします」といって里の家に帰り、五、六日寝たばかりでとうとう果敢^{はか}なくなつてしまった。

主上は恋慕の思ひに深くしずんでおられた。お慰め申そうと建礼門院より小督殿という女房を差し上げた。小督は桜町中納言成範郷^{しげのりきょう}の娘で、宮中一の美人であるし、琴が上手であった。冷泉大納言隆房郷がまだ少将だった頃である。見初めたのが小督である。思ひにた

へ馬を歩ませた。龜山あたりの近く、ひとむらの松の立っているか
たから、かすかに琴の音がきこえた。馬ととめてこれを聞くと、夫
を思うて恋う想夫恋の曲であった。腰より横笛を抜き、一声吹きな
らして、門の扉をほとほと叩き「御所より仲国がお使いに参りま
した」というと、戸を細めにあけ、小女房が「現^{うつつ}なやか^{いっ}る賤^{しん}き賤^{しん}
が家に、何の宣旨の候べき、門違へにてましますか」とことわる。

【門閉ざされては叶ふをまじと】と門を押しあけ中にはいた。「御
書を賜って参りました」と御文を差し出す、小督が見ると正しく主
上の親書である。すぐに返事をしたためて、女房の装束ひと重ねを
仲国へ引出物とした。そして「入道相国殿が恐ろしことを言われる
と聞き、情けさにここへ来ました。このような住まいですから琴を
弾いたことはありません。明日は大原の奥へ参ろうと思ひ勧められ
るまゝに琴を弾きましたむと」はげしく泣き出された。

仲国は馬を走らせ内裏へ帰ると、主上はまだ御座所に起きておられ

た。主上は「今夜すぐに連れて参れ」と仰せられる。

謡曲では【迎への舟車の、やがてこそ参らめと】とそれとなく迎へが来ることを匂わせているだけである。酒宴をして、仲国は舞いを舞い、小督に見送られて都へ帰って行く所までである。

謡曲はさすがに、劇的に作られてある。

仲国は清盛に知られると恐ろしかったが、嵯峨へ迎えに行き、内裏へ連れて帰り人目につかぬ場所に忍ばせた。主上は夜ごとにお側へ召されている間に姫君がひとりお生まれになった。坊門の宮範子内親王である。清盛はこれを知り、小督をとらへ、尾にして釈放した。

木曾

謡曲では木曾義仲のことは、「木曾」という曲にあります。これは義仲が兩道を討ち従えて、都へ上る途中、植生に陣を取った、ここに植生八幡宮があり、八幡大菩薩は応神天皇の化身であられますゆえ願書を奉納し、明日の合戦の勝利を祈願しようと、覚明に願書を書かせ、奉納し、翌日の倶利伽羅の戦いに大勝利を得たと言う曲ですが、この中の「願書」のところが難しいとされています。

さて寿永二年三月上旬、兵衛佐頼朝と木曾冠者義仲との間に確執あり、そのため頼朝は軍勢十万余騎を率いて、信濃の国へ出発した。

木曾義仲はこれを聞くと軍勢三千余騎で依田城を出て、信濃と越後の境にある熊坂山に布陣した。義仲は今井四郎兼平を使者として頼朝のもとへつかわし「そもそも御辺は関八州を討ち従え、東海道より攻め上り、平家を追い落とさんとし給ふ、この義仲も、東山、北陸兩道を討ち従え一日たりとも先に平家を滅ぼそうとしておるに、

※甲斐武田信光
の讒言による

いかなる子細あつて義仲を討とうとされるか、御辺と仲違いして平家の笑い者になろうなどとは思ひもよらぬ」と言わせたが、頼朝は「まさしく頼朝を討たんとする謀反の企てありと告げ知らせる者がある。ここで手を引くわけには行かぬ」と答へ返してきた。

義仲はやむなく、嫡子の義重という今年十一才になった小冠者に、一騎当千の武士をつけて送り、他意のないことを示した。頼朝もそれで疑いも解け、この子を我が子と致そうと鎌倉へ帰った。

木曾義仲は遠く信濃の国にあり、越前に火打ひうちが城を作らせ兵六千余騎で守らせた。この城は堅固な城であったが、平家に返り忠するものがあり落ちた。平宗盛をはじめ平家一門大いに喜び、維盛、通盛忠度ら十万余騎を彌波山とみなやまへ向かわせた。謡では「さても平家は越前の城が城を攻め落とし都合その勢一万余騎彌波山まで押し寄せる」と謡っている。義仲は五万余騎を率いて彌波山にはせ向かった。

義仲は「味方は僅か五万余騎、計略を以て防せがんとて、白旗数多

調へつゝ黒坂の上に押し立てゝ、敵の心を疑わしめ、山中に屯させ
夜に入り大手搦手より一度にかかり、俱梨迦羅が谷へ敵を落とさん
と】植生に陣した。そこで義仲は【これより北に当たって夏山の茂
みの中に、朱の玉垣ほの見えて、方削造りの社あり、如何なる神を
崇め奉りたるぞ、義仲何となう陣取りしに、八幡の御地なるこそ吉
兆なれ】と、学僧の太夫房覚明に願書を書かせ奉納した。

願書の願書と、ほど同じではあるが少し違ふところもあるので書きま
す。「帰命頂礼、八幡大菩薩は、日域朝廷の本主、累世明君の鼻祖
たり、宝祚を守らんが為、蒼生を利せんが為に、三身の金容を顕し、
三所の権扉を押し開き給へり。こゝに頻年よりこの方、平相国と云
う者あり。四海を管領し万民を悩亂せしむ、これすでに仏法の怨、
王法の敵なり、義仲いやしくも弓馬の家に生まれて、わづかに箕裘
の塵を継ぐ、かの暴悪を案ずるに、思慮を顧みるに能はず、運を天
道に任せて、身を国家に投ぐ、試に義兵を起こして凶器を退けんと

【帰命頂礼（頭を足につけお祈し
ます）八幡大菩薩は応仁天皇の化身
であられますゆゑ、我が朝の本主で
られます。大つ日継ぎの御位を守り
衆生を救わんと、野陀三尊の姿を
現わし三所の権扉となられました。
近年平相国が、天下を一手に支配し
万民を悩ましています。まさしく仏
法の仇であり王の敵であります。
私は弓馬の家に生まれ及ばずながら
父祖の業を継ぎました。
清盛の暴悪を思ふと一身の分別にば
かり云つてはおれません、運を天に
まかせ、身を国家の爲にならうと

欲す、しかるに闘戦両家陣を合わすといへども、士卒未だ一致の勇
を得ざる間、まちまちの心を恐れたるところに、今一陣に旗を挙げ、
戦場にして忽ちに三所和光の社壇を拝す、機感の純熟明かなり、因
徒誅戮疑なし、歛直涙こぼれて、渴仰肝に染む、なかんづく祖祖父
前陸奥守義家の朝臣、身を宗廟の氏族に帰附して、名を太郎義家と
号せしよりこの方、その門葉たるもの、帰敬せずと云うことなし、
義仲その後胤として、頭を傾けて年久し、今この大功を起す事、
譬へば嬰兒の貝を以て巨海を測り、蟪蛄が斧を怒らかいて、隆車に
向ふが如し、しかりといへども、国の為、君の為に於て此を起す、
全く身の為、家の為に於てこれを起さず、志の至り神感空にあり
頼もしきかな、嘗ばしきかな、伏して願はくは、冥顯威を加へ、霊
神力を合わせて、勝つ事を一時に決し、仇を四方へ退け給へ、然れ
ば即ち丹祈冥慮に叶ひ、玄鑑加護をなすべくば、まづ一つの瑞相を
見せしめ給へ、 寿永二年五月十一日 源義仲敬って白す このよ

試しに兵を挙げ、因敵を討とうとして
います。しかし、ここに平家の軍
勢と対陣しました。が、その士気がもう
一つ上がりません。将兵の心のまよ
みであるのを恐れていました。この
戦いの場には、ぞむ八幡三所の御社
をはいすることができました。神へ
の感応成就はあきらかで、道賊を激
ぼすことは疑いありません。昔びの
あまり涙がこぼれ、神助の有難きは
肝に銘じます。ことに祖父祖の源義
家が一族の氏神と仰ぎ、自らから八
幡太郎と名のつて以来、門に連なる
もので信仰を捧げない者はありません。
今この義仲もその後胤として年久し
く敬仰しています。今私が大事を起
す事はたとへば、赤子が貝で大海
の水を計り、かまきりがその鎌を振
り上げて大きな中に立ち向かうよう
なものであります。私の至誠は
神も存じます。まことにたのもし
く、喜ばしい限りです。神の威と靈
驗をもちまして、敵をも私の心
のしりが神慮にかなひ加護を賜り
ますならば、先づよき兆をおしめし
さい。源義仲敬って白す

うにしたため終わると、義仲は二筋の矢を添えて神殿に奉納した。すると雲の中から山鳩三羽が飛んできて、白旗の上に舞い翔った。

【さてこそ平家の多勢を俱利伽羅が谷に、追落し】とあるが、源氏は、日暮れまで時をかせぎ、夜になって平家の大軍を俱利伽羅谷へ追い落とそうと計った。平家はそれとも知らず、いたずらに日を暮らした。とかくするうち、搦め手へ回った源氏の一万余騎は俱利伽羅の堂のあたりで、どっと関の声を上げた、振り返ってみると白旗が雲のように上がっている。そのうちに大手から木曾勢一万余騎が関の声を合わせ、さらに彌波山の麓に隠しておいた一万余騎、今井四郎の勢と前後四万余騎がわめき上げた声は山も川も一度に崩れるかと思うばかりであった。関は次第に濃ゆくなる、前後から敵は攻めてくる、一度くずれ立つとこれを立て直すことは容易でない、我先にと俱利伽羅谷へと馬を乗り下ろした。その結果、馬には人が、人には馬がおち重なり、おち重なり、平家の軍勢で生め尽くされた。

※謡曲乱曲

「俱利伽羅落」

さる處に夜に入れば、敵に大勢と見えん爲に千頭の牛を集めて皆角の先に火を貼し追ひ詰め給へば、光塵空に充ち満ちて、五月間、おぼつかなくも暗き夜も暗からぬ星を集むれば敵大勢と心得、左右なう顧り得ざりしを、今井の四郎六千余騎大手より関を作れば彼らの林の五万余騎、一度に関を、どっと合わすれば、敵取る物も取りあへず俱利伽羅が谷にぱっと落つ、馬には人人には馬、落も重なり落も重なり、七万余騎は俱利伽羅が、谷の深きをも、浅くなる處廻りたりけり。

その為、この谷の辺には、矢の穴や刀の傷跡が今でも残っていると聞くとあります。

謡曲では、俱利伽羅くりからの戦いは、曲の最後に【さてこそ平家の大勢を、俱利伽羅が谷に追い落とし、勝利を得しも実に八幡の神力なり】と結んでいる。

實まね 盛もり (巻七 實盛)

謡曲の「実盛」は、遊行上人ゆぎょうしやうにんが説法しておられると一人の老翁らうおうが毎日聴聞に来る。実は実盛の幽霊である。そして後半に甲冑姿かっちゆうさの実盛が現われ、篠原しのはらの合戦の様子を詳しく語るのであるが、謡曲では篠原の合戦が主体である。平家物語によると、石橋山の合戦のとき、頼朝に矢を向けた武士達は、みな都へ逃げ上り平家方についた。これ等のものは、次の戦のあるまで連日集まつて、宿所で酒宴をしていた。実盛の所へ集まったとき実盛が「つらつら当世の有様を見

るに、源氏の方はますます強く、平家はどうも旗色が悪い、おのおの方、木曾殿の方へ参ろうではないか」と云うと一同「げにも」と同意した。また翌日「さても、昨日実盛が申したことは、どう思われるぞ」と尋ねると、俣野五郎またのという者が「我等は東国にて人に知られた者、旗色を見てあちらこちらへと、寝返っては見苦しい、おのおの方はいざ知らず、この景久はあくまで平家の味方して討ち死にする覚悟かくごだ」と云った。実盛は「実はおのおの方の氣を引いてみようと思つて云つたことだ、実盛も今度の北国で討ち死にしようと言つて覚悟かくごをきめた」と改めて真意を明かした。しかもその約にたがえず、その座にあつた二十余人が残らず、北国で討ち死にしたのは哀れである。

さて平家は加賀国の篠原に退き人馬を休ませていた。寿永五年五月二十日に、木曾勢五万余騎が押し寄せた。

武蔵の国の住人長井育藤別当実盛は味方の軍勢が総崩れくずれになつた中

でただ一騎、引き返し引き返しては、防ぎ戦った。かねて覚悟を決

めていたので、赤地の錦の直垂に、萌黄緘ひたれの鎧着て、鍬形打くわがたつたる

胸の緒をしめ、黄金作りの太刀を佩き、二十四本差したきりふの矢

を負い※しげと滋藤の弓を持ち、連銭※れんせんあしげ葦毛の馬に金覆輪きんぐりんの鞍をおいてまたがつ

ていた。木曾殿の方から手塚の太郎光盛が進み出て、声をかけた。

「殊勝しゅうしょうなり。いかなるお方なれば、味方の勢はみな落ち行きたるに、

ただ一騎踏み止まって戦わるとは、さてもゆかしきお心ばえと見

えたり、名乗らせ給え」

「そういうわどのはたれぞ、なんと申さるる」

「信濃の国の住人手塚太郎金刺光盛」

「さては、たがいによりき敵なり、和殿を見下げるのではないが、存

ずる旨あって、名は名乗らぬ」

と斎藤別当が馬を押しならべた。手塚の郎党は、主人を討たせじと、

斎藤別当とおし並べて、むんずと組みついた。

※下の方ほど色

を薄くぼかし

た緘

※葦毛に灰色の

斑点の交じつ

た色の馬

※弓の柄の部分

を藤で巻く弓

「おのれは日本一の剛の者と組み打ちする気か」

と胸ぐらをとって引き寄せ、鞍の前輪に押しつけ身動きもさせず首
かき切つて捨てた。手塚の太郎は、左手に馬を回し、実盛の鎧の草
摺^{ずり}りをまくりあげて、二太刀刺し、弱ったところに組みついて、と
もどもに馬よりどうと落ちた。戦いに疲れ、手傷を負い、その上老
武者である。ついに手塚のため組みしれ、首を落とされた。

「光盛は、奇異の曲者を討ち取つて参りました。侍かと思れば錦の
直垂を着ております。また、大将かと思れば、続く軍勢がおりませ
ん。名乗れや名乗れと責めました、遂に名乗りませぬ。言葉は関
東なまりでした」このあたりは、謡曲のシテの語りと同じです。

木曾殿は「おお、それは、斎藤別当でないか、しかしそれなら、白
髪のはずだ、鬢^{びんぴげ}の黒いのは解せぬ。樋口次郎は見知つて居ろう、
樋口を呼べ」

樋口は一目見るなり、

「あないたましや、斉藤別当にて候」と涙を流した。

「それならばはや、七十才をこえ、鬢鬚の黒いのはなぜか」と尋ねる
と、樋口次郎は涙をおさへながら、

「斉藤別当が、つねづね『六十すぎて戦場へ向かうときは、鬢や鬚を黒く染めて、若がえろうと思っている。白髪頭を振り立てて若殿ばらと先駆けを争うも、あとなげなし、また、老武者と人に侮られあなどるのも、口惜しい』と云っておりましたが、はたして染めて参りました。ために洗わせて御覧じませ」

木曾殿が、首を洗わせて見るとすっかり白髪になった。

また、謡のクセに『また実盛が、錦の直垂を着ること』は、宗盛にいとまごいに参上したとき、

「この度、北国へまかり下りますうえは、さだめて生きてはかえりませまい。われはもと越前の住人。近年はご領を賜って、武蔵の長井に居住しておりました。事のたとへにも『故郷へは錦を着て帰れ』

とか。なにとぞ、錦の直垂の着用をお許し下さい』と申したので、内大臣も「けなげにも申したるかな」お許しになった。昔の朱買臣しゅばいしんも、錦の袂かいを会稽山かいけいざんに翻し、今の実盛は、その勇名を北国に上げたとも云えよう。さる四月十七日、十万余騎で都をたった平家の軍勢は、五月下旬に都へ帰ったときは、二万余騎であった。

謡曲の後半、とくにシテの語り以後はほとんど平家物語と同じです。前半については、謡曲の本の最初の解説に「時宗縁起ときむねえんぎ」に『加州江沼郡篠原という砂原に、実盛が首洗之池とて大きな池あり。その上を手塚山という。昔このところ実盛・光盛組討の場なり（中略）その後、相模国藤沢他阿弥上人巡国の節、このところを通られしに、実盛の魂魄出で、跡を弔ひ給へといひて見えず。上人感涙し、このところに七日逗留とまりどまりして別時の大念仏を始め給う』とあります。こうしたところが作られたのでしょう。

巴、兼平（巻九 木曾の最後）

義仲は、寿永二年八月十日左馬頭に任ぜられた。朝日の將軍という院宣を下された。しかし我が高名顔に、官位の昇進を思うまゝに行なったり、行儀作法も悪く、ひんしやく聲をかったが義仲を恐れて、口になかった。

平家は、讃岐の屋島にあり、山陽道八ヶ国、南街道六ヶ国を攻め取った。義仲は直ちに討つ手を差し向けたが、※備中の水島に破れた。

※水島の戦
寿永二年閏十月

義仲はこれを聞き、一万騎を率いて備中の国万寿の庄で勢揃いし、屋島へ押し渡ろうとしているところへ、京都の留守に残しておいた樋口次郎兼光から「十郎藏人が院の御寵愛を得て、ちやうあいさまざまにざんさう譏奏されておられます。西国の戦をしばらく差し置かれ、急ぎのぼらせたまへ」と伝えてきたので、都へ馳せ帰った。

都には、源氏の軍勢が満ちあふれていた。いたるところで、人家に侵入して略奪するものが多かった。賀茂、八幡のご料地にさえ、見

※聲をしかめる

さからいなく押し入って、青田を刈って秣まぐさにする連中もいれば、人の倉をこじあけて物を取る連中もいた。法皇から義仲へ「狼籍ろうぜきをしずめよ」と仰せられた。義仲は都の守備をするものが、その辺にくらでもある田を刈らせ秣にし、兵糧米を調達したとて、別に異にするに当たらぬ。宮々の御所や大臣の家に押し入ったわけでない」とほざいた。法皇もようやく木曾討伐を思いたゞれる様になり、召すべき武士もないまま、叡山と三井寺の僧どもを召され、公郷、殿上人も軍勢を集めた。近江守源藏人仲兼、山本冠者義高等法住寺へ籠もったが、今井四郎兼平、樋口次郎兼光等に攻められ、斬られた首を六条河原にかけならべられた。

義仲は家の子郎党を集め

「義仲は一天の君に向かい戦に勝った。わしは主上になったものか、法皇になったものか、法皇になろうと思うが坊主頭もおかしい、主上になると、童になるのはこまる。さらば関白になろう」といった。

覚明がすすみ出て

「関白になるのは、藤原鎌足の末裔まつあとの藤原氏だけと決められています。殿は源氏でいられますから、関白になれますまい」といった。

義仲の狼籍ろうぜきをしずめようとして頼朝は、弟の範頼、義経に六万余騎を率いさせて都へ上らせたが、もはや御所も内裏も焼き払われたことが伝わり、「今すぐ都へ上って、いくさすべきでない」として尾張の熱田の辺にとどまっていた。

義仲はこの情報を聞き、平家に使者を送り

「急ぎ上洛じやうらくせられよ。一っになりて、関東へ馳せ下り、兵衛の佐を討伐せん」と申し入れた。何か今の世のどこかの国と似ているようだ。

寿永三年正月十一日義仲は院に参上して、平家討伐のため西国に出陣すべき由を奏上した。十三日出発と決められたが、東国より頼朝が、範頼、義経を差し上げた数万余騎がすでに美濃、伊勢の国に到

達したと言ふ情報が入り、義仲は直ちに、宇治瀬田の橋を引き外し、瀬田へ今井の四郎兼平の八百余騎、宇治へは五百余騎を差し向けた。佐々木高綱、梶原景季を先陣に、源氏は宇治川を一気に突破すると、義経はたちまち都へ入って法皇の御所をおさえた。法皇を取られた木曾は、もはや賊軍である。わずかな手勢を率いた義仲は、瀬田あたりを固めていた腹心の、今井四郎兼平を求めて、源氏の大軍を駆け破り駆け破り、駒をすすめた。今井もまた、義仲の身を案じて引き返す途中、ばったりと出合ひ、手を取りあつて喜んだ。

さて義仲は、信濃から、巴、山吹という二人の美女を都まで連れてきていた。山吹は病のために、都に残してきた。巴は、色白く、髪長く、容貌が真に美しい。しかも屈強の荒馬乗りで、どんな難所でも乗り下りし、弓矢打物取つては、如何なる鬼神にも立ち向かおうと言ふ一騎当千の勇婦である。多くの者が討たれたが、巴は討たれもせず、最後の七騎のなかに残っていた。

謡曲の『巴』のクセでは『さても義仲の、信濃を出でさせ給ひしは
五万余騎の御勢くつばみを並べ攻め上る、となみ礪波山や俱利伽羅志保の
合戦に於ても、分捕り功名のその数、誰に面を越され、誰におとる
振舞の、なき世語り』と謡い、その後粟津々原の合戦の様子を謡う
ことになる。

義仲と今井の周囲に散り散りになっていたものが駆け集まりいつか
三百余騎になった。義仲は巴を呼んで「そなたは女だ、これより、
いづくなりと落ちて行くがよい。われはここで討ち死にする覚悟だ、
義仲は最後まで女を連れていたとあつては末代までの恥となる、と
う去れ」と言われた。

しかし巴はなお離れがたく、「よき敵と出合い、木曾殿に最後の戦
してお目にかけ別れたきもの」と、馬をとめて待っていると、そこ
へ、武蔵の国の住人の御田八郎師重三十騎ばかりが現われた。その
中へ割って入り、御田八郎に押し並べ、むんずと組み、引き落とす

首かき斬った。そして鎧を脱ぎ捨て落ちていった。

さて『巴』の謡では『さてこの原の合戦にて、討たれたまひし義仲の、最後を語りおはしませ』で『頃は睦月むつきの空なれば、雪はむら消えに残るをたゞ通路かよひぢと汀みぎわをさして、駒をしるべに落ち給うが、薄氷の深田に駆込み弓手も馬手も、鎧は沈んで下り立たん頼りもなく、手綱に縋って鞭を打てども、退く方も渚の浜なり前後を忘じて控へ給へりこは如何に浅ましや。かゝりし処にみづから駆け寄せて身奉れば、重手は負ひ給ひぬ、乗替に召させ参らせ、この松原に御供し、はや御自害候へ、巴も共と申せば、その時義仲の仰せには、汝は女なり、忍ぶ便りもあるべし、これなる守り子袖を、木曾に届けよこの旨を、背かば主従三世の契り絶え果て、永く不興と宣へば巴はともかくも、涙に咽ふばかりなり、かくて御前を立ち上がり、見れば敵の大勢、あれは巴か女武者、余すな洩らすなと、敵手繁き懸れば、今は退くとも通るまじ、いで一戦嬉しやと、巴少しも騒が

すわざと敵を近くなさんと、長刀ひきそばめ、少し恐るゝ氣色なれば、敵は得たりと、切つて懸かれば長刀柄長くおっ取り延べて、四方を払ふ八方払ひ、一所に当たるを木の葉がえし、嵐も落つるや花の滝波枕を畳たたんで戦かひければ、皆一方に切り立てられて後も遙かに見えざりけり、後も遙かに見えざりけり、今はこれまでなりと、立ち返り我が君を、身たてまつれば傷わしや、はや御自害候ひて、この松が根に伏したまひ御枕のほどに御子袖、肌の守りを置き給ふを、巴泣く泣く賜りて、死骸しかいに御暇申しつゝ、行けども悲しや行きやらぬ、君の名残りを如何にせん、とは思へどもくれぐれの、御遺言の悲しさに、栗津あわすの、汀えびなに立ち寄り、上帯うわおびきり、物具心靜かに脱ぎ置き、梨打烏帽子なしうち同じく、かしこに脱ぎ捨て、御小袖を引き被きそのきわまでの佩添はせぞえの、小太刀を衣に引きかくし、所は此処ぞ近江なる信楽笠を木曾の里に、涙と巴はただ一人落ち行きし後ろめたさの執心を弔ひて賜ひ給え』と現わしている。

巴はその後、越後の国へ落ち、尼になった。

『兼平』の曲では義仲、兼平の三百余騎は敵六千余騎の中へ駆け入った。群がる敵を駆け破り、駆け抜けし敵の後ろへ出たときは、今井とただ二人となっていた。

そこへまた新手の五十騎ほどが現われた。今井は義仲に「兼平はこの敵をしばらく防ぎ参らせる、君はあの松原へ入らせ給え」という。義仲は「多くの敵に後ろを見せて、ここ迄きたのは、ただそなと一と所で死なんが為であった、一つ所で討ち死にしよう」というのを、兼平は「最期に不覚^{ふかく}をいたさば、後世までも名に傷がのこります、ただ曲げてあの松原で静かに御自害下さい」という。

義仲もつともと栗津の松原へと駆けた。正月の二十一日、田には薄氷が張り詰め、何れが深田^{ふかだ}とも分からず、忽ち深田のなかに馬の足を踏み入れ、鎧^{よろい}を踏ん張っても、鞭で打っ手も馬は動かず、そのときいづれともより放たれた矢が、義仲の兜の内に当たった。痛手にたまらず馬よりどうと落ちた。そして石田の郎党二人が駆け寄り、

ついに義仲の首を上げた。そして首を太刀の先につらぬき、高々とさしあげて「木曾殿をば、三浦の石田為久討ち取った」と名乗るの兼平の耳に入った。

「今はたれをばかばわん。これ見たまえ、東国の殿原、日本一の剛の者が自害の手本よ」と叫び、太刀の切っ先を口にふくみ、馬から真っ逆様に飛び落ちて死んだ。

謡曲『兼平』の後半、サシ、クセ以後は、ほとんど平家物語と同じである。兼平の最後のところは

『これぞ最後の広言と、鎧踏ん張り、大音あげ木曾殿の、御内に今井の四郎、兼平と、名乗りかけて、一騎当千の、秘術を現わし大勢栗津の、汀におっ詰めて磯打つなみの、まくり切り、蜘蛛手十文字に、打ち破り駈け通って、その後、自害の手本よとて、太刀をくわへつゝ逆さまに落ちて買かれ失せにけり、兼平が最後の仕儀目を驚かす有様なり』と謡っている。

さて義経は木曾義仲を都より追討し、寿永三年正月二十九日、範頼義経は参院して、平家追討のために西国へ発向すべき由を法皇に奏上した。

西国に落ちた平家は、勢いを盛り返し、去年の冬頃から福原の旧都に住み着き、一ノ谷をば西の城郭に構え、東の生田の森を大手の木戸と定めた。

源氏のは大手の大將は範頼、搦手の大將は義経、大手は摂津の国昆陽野（伊丹）に、搦手は丹波と播磨の境三草山の東に陣取りをました。義経は軍を二手に分け、土肥次郎実平には、一ノ谷の西の木戸（明石の方面）へ、義経は一ノ谷の後ろ（ひよりこえ）鴨越へ向かうことゝします。

この鴨越の坂落としては有名な話である。

籠かご（巻九 二度駈けのこと）

「籠」の曲に【さるほどに平家は去年播磨の室山、備中の水島二度の合戦にうち勝って山陽道南海道合わせて十余ヶ国の兵。十余余騎津の国一ノ谷に籠りける、東は生田の森、西は一ノ谷を限って、それは赤旗いくらも立て並べ、春風にたなびき天に翻る有様、猛火雲を焼くかと思えたりこの城の前は海後は山左は須磨、右は明石：味方の勢六万余騎を二手に分けて範頼義経の大手掘め手の海山かけて須磨の浦、四方を囲みて押し寄せる】と一ノ谷の平家の軍勢の勢と、寄せ手の源氏の軍勢の様を謡って居ます。

籠の曲は源氏の梶原の源太景季の生田の合戦を謡っています。

この曲も修羅物（二番目物）であるから謡の終わりの方は合戦の有様を謡ってあります。しかしこの一ノ谷の合戦の様子は、なぜか負けた平家の武者の物語の曲が多いようです。「忠度」は平忠度が源氏方の岡部の六弥太に討たれたことを、平敦盛が熊谷の直実ちかみに討た

れた『敦盛』^{しゅんぜい}『俊成敦盛』があります。忠度は和歌の道に長け

「行き暮れて木の下蔭を宿とせば花や今宵の主ならまし」と読んだ句は有名でこの曲にも出てきます。敦盛は笛の名手でした。

このように文武に長けた若武者の哀れさが能の幽玄^{ゆうげん}を現わすのに合ったのかも知れません。

簾は源氏の武者梶原源太景季ですが、簾に梅の一枝を挿して笠印としたという優しさを謡っています。

まず、前半のシテの語りの中に『源氏の方に梶原平三景時、同じき源太景季、色殊なる梅花のありしを、一枝折って簾に挿す、この花即ち笠印となりて』『簾の梅とは申すなり』とある。また、この曲のキリで『所は生田なり、時も昔の春の、梅の花さかりなり、一枝手折りて簾に挿せば、もとより雅びたる若武者に、相あふ若木の花^{かすち}髪かくれば簾の花も源太も我さきかけん、さきかけんとの、心の花も梅も、散りかゝって面白や』と謡っている。

平家物語で、梶原一族の戦い振りは、「梶原が五百余騎、生田の森の逆茂木を取り除けさせて、城の内へ喚いて駆く。次男平次あまりに先を駆れて進む間、父平三、平次討たすなものと、父の平三、兄の源太、同じき景家統いたり。堅様横様蜘蛛手十文字に駆け破つて、さっと引いて出でたれば、嫡子の源太は見えざりけり。返せやとまた取って返す。

このところを謡曲では「八騎が中に、とり籠めらるれば、兜も打ち落とされて、大童の姿となって、郎党三騎に後ろを合わせ、向ふ者をば、拝みうち、また巡り逢へば車切り、蜘蛛手かく縄十文字、鶴翼飛行の秘術を尽くす」と謡う。梶原これを見て、急ぎ馬より飛んでおり、父子して敵を打ち、敵中から子を救い出してきた。

※兜をかぶらず
髪を散らす姿

忠度、俊成忠度

謡曲では、この二曲とも修羅物である。『忠度』では、後半で一の谷の戦いで、岡部の六弥太に討たれる合戦の様子を謡っているし、『俊成忠度』では、修羅王を元の下界へ追っ下すという戦いの有様を謡っているためである。

しかし忠度は、何れの曲の前半にあるように、和歌の道に深く、三位俊成の郷に師事し、世に知られた若武者であった。寿永二年平家が都落ちしたとき、途中から引き返し俊成郷を尋ね、「この二三年は、京の騒ぎ、国々の乱れ、あまつさへ平家の上にかかわること、しかも主上もはや都を立ち退かれ、一門の運命はや尽き果てゝ候らへへば、勅選の歌集のご沙汰承って候ひしに、一首なりとも御選を蒙らうと存じ候ひつるに、かゝる世の乱れが出で、その沙汰なく候。この後世静まって選集の沙汰候はゞ、これに候ふ巻物の中に、一首なりとも御選をいたゞき、草葉の陰にても嬉しと存じ候はゞ……」

と日頃詠みおいた中の、秀歌と思しき百余首の巻物を俊成郷に差し出した。三位はこれを開いて見て「このような形見を下され決して粗末には扱いません、それにしても、このようなときわざわざお訪ね下され、風雅に対するお心、深く感じ申します」と涙をとどめかねる思いであった。後の世、勅選の千載集が編まれるとき、あずかった巻物のうち採用したい歌はいくつもあつたが、朝敵となつた平家方の人なので「故郷の花」という

さざなみや志賀の都はあれにしを

昔ながらの山桜かな

という歌を、一首だけ選び、読み人知らずとして勅撰集にのせた。

このところを『忠度』のサシで『さなきだに妄執多き娑婆なるに、

何なかなかの千載集の。歌の品に入りたれども、勅勘の身の悲しさ

は、読人知らずと書かれしこと、妄執の中の第一なり』と謡ってい

るし、また、『そもそも御白河の院の御宇に、千載集を撰はる、五

条の三位俊成の郷、承^{せん}つてこれを撰^{せん}ず。年は寿永の秋の頃、都を出でし時なれば、さも忙がわしかりし身の、心の花が蘭菊の、狐川より引き返し、俊成の家に行き歌の望みを嘆きしに、望み足りぬれば』とも謡っている。

『俊成忠度』には、やはり前シテで『さても千載集に、一首の歌を入れさせたまふ、御志は嬉しけれども、読人と知らずと書かれしこと、心にかゝり候』これに対してツレの俊成の郷は『もつともそれはさる事なれども、朝敵の御身を顕^{あらわ}さんは世の憚^{はばか}りなり、よしやこの歌あるならば、御名は隠れよもあらじ、御心安く思し召せ』と答へている。

忠度は、一ノ谷の戦いとき、「旅宿の花」という題で

行き暮れて木下蔭を宿とせば

花や今宵の主ならまし

という歌を、短冊に書き、箆に挿していた。これは二曲ともそのことを

語っている。

『忠度』では、キリで岡部の六弥太に討たれ、六弥太が『傷^{いた}わしや
かの人の御死骸を見奉れば、その年もまだしき、長月頃の薄曇り、
降りみ降らずみさだめなき、時雨ぞ通う村紅葉の、錦の直垂はたゞ
世の常によもあらじ、いかさまこれは公達の、御中にこそあるらめ
と、御名ゆかしき処に、^{りよし}箆を見れば不思議やな、短冊を附られた
り、見れば旅宿の題をすえ』とある。

『俊成忠度』では、ワキは岡部の六弥太で俊成郷に和歌での値遇^{もぐ}を
得ている、この短冊を見せようと尋ねて行く、そして『只今参るこ
と余の儀にあらず、西海の合戦に薩摩の守忠度を、某が手に懸け失
ひ申して候、御最後の後、尻籠^{しこ}を見候らへば、短冊の御座候』とツ
レの三位に見せる、『げにや弓馬の道ならねど、何時しか世に名を
残し置き給ふ事の哀れさよ、何々旅宿の花という題にて』と先の歌
を詠む。

さて忠度の一ノ谷での討死にの様子は、平家物語も謡曲も『忠度』も全く同じである。

『我も船ふねに乗らんとて、汀の方にうち出しに、後ろを見れば、武蔵の国の住人に、岡部の六弥太忠澄と名のって、六七騎にて追っ駆けたり、これこそ望む所よと思ひ、駒の手綱を引り返せば、六弥太やがてむずと組み、両馬が間にどりと落ち、かの六弥太を取って抑へすでに刀に手を掛けしに、六弥太が郎等、御後ろより立ち回り、上にまします忠度の、右の腕を打ち落とせば、左の御手にて六弥太を取って投げ付け、今は敵はじと思しめして、其処退き給へ人々よ、西せ拌こしまんと宣ひて、十方世界念仏衆生せうじやう撰せん取と捨すとのたまひし、御声の下よりも、傷いたわしやあへなくも、六弥太太刀を抜きもち遂に御首を打ち落とす』と討死の様子を謡っている。そして簾を見ると短冊に旅宿の花と題とつけた、先の歌が書かれていた。

敦盛^{あつ}・生田敦盛^{いくた}（巻九 敦盛最後のこと）

敦盛の曲も一ノ谷の戦いで、曲のキリで敦盛が熊谷次郎直実と戦い、討たれるさまを語った曲で修羅物です。

生田敦盛も修羅物ですが、『通盛』とこの曲は修羅物でも、他の修羅物と趣がすこし異なります。

さて一ノ谷の戦いは、平家の負けとなったので、熊谷次郎直実は、平家の公達は船に乘ろうとして渚のほうへ落ちて行くであらう」と渚のほうへ馬を進ませて行くと、練貫^{ねりぬき}に鶴^{つる}を繰った直垂に萌黄匂の鎧を着て、鎌型打った兜の緒をしめ、黄金作りの太刀を佩き、滋藤の弓を持ち、連銭^{れんせん}葦毛^{あしけ}の馬に金覆輪^{きんぷくりん}の鞍を置いて乗った武者一騎が、沖の船をめざして、泳がせているのが目に入った。

「よき大将かと見まいらする。敵に後ろを見せたもうか、返させたまへ」と扇で差し招いた。その武者は引きかへしたところを波ち打ち際で馬をおしならべ、むずと組んでどうと落ち、とりおさへて首

をかこうとした。

このところを謡のキリで『後ろより、熊谷の次郎直実、遁さじと、追っ駈けたり数盛も、馬引き返し、波の打物抜いて、二打三打は打つぞと見えしが、馬の上にて、引っ組んで、波打ち際に、落ち重なって、遂に打たれにけり』と謡う。

熊谷は、取押え首を搔こうと兜を押し上げてみると、顔に薄化粧しお齒黒をつけた、我が子の小次郎くらいの十六七の美少年である。

よき公達、この人一人を討てばとて、勝戦に負けることもあるまいこの若殿の父は、子が討たれたと聞いたたら、どのように嘆き悲しむか、よしよし助けまいらせんと、後ろを振り返ってみると、土肥、梶原が五十騎ばかり近づいてくる。「いかにも助けまいらせんとは

存ずれど、味方の軍兵、よもお逃がし候まじ、あわれ、直実が手にかかり候へ、後世の供養つかまつらん」と泣く泣く首をかき斬った。首を包もうと、直垂を解いてみると、錦の袋に入れた笛が腰にさし

てあった。「さては、この夜明けに、城の中で管弦かけんの音がしたのは、

この人達であつたか」『さては如月六日の夜にもなりしかば、親に

て候経盛我等を集め、今様を謡ひまい遊びしに、さてはその夜の御

遊びなりけり、城の内にさも面白き笛の音の、寄手の陣まで聞こえ

しは』と謡ふ。

この笛は、祖父の忠盛が笛の名手で、鳥羽院から賜つたものを、父の経盛が貰うけ、敦盛が名手であつたため、これを持たしたもので、その名を小枝といつた。謡曲の前上歌で『好ける心に寄竹の、

こだせもめれきぎ

小枝蟬折様々に、笛の名は多けれども、草刈りの吹く笛ならばこれ

※

も名は、青葉の笛と思し召せ』と謡っている。

今度一ノ谷にて討たれ給へる平家の一門の人々は、越前三位通盛、

弟藏人大夫成盛、薩摩守忠度、武藏守知章、備中守師盛、尾張守清

定、淡路守清房、経盛の嫡子皇后宮亮経正、若狭守常俊、その弟大

※小学生唱歌
にも出てくる
笛の名前

夫敦盛以上十人とぞ聞こえしとあります。そのうち五人が謡に謡われています。

平家物語では、そのうち経正、知章、通盛の討死の様子は敦盛、忠度の様に詳しくは書かれていません。

生田敦盛は法然上人があるとき賀茂へご参詣されたとき、松ノ下に箱の蓋に二才くらいの男の子が捨てられてあった。不憫あはれ思われ連れて帰られて育てられた。この子が十才くらいのとき、両親のないことを嘆くので、説法の時このことを話された。その時若い女が走りでて、我が子であると言う。密かに尋ねられると、敦盛の子だと言う。この子はせめて夢にでも自分の父の姿を見たいと、賀茂の明神に祈誓しているという賀茂の明神の御告げで生田の森へ来るのが前提である。

そこで、明神が憐れみ閻魔えんまに使いされ、閻魔から今宵かぎの暇を貰い、親子の対面を許されたと、敦盛の幽霊が出てくる。そして、

『然るに平家の、栄華を極めしその始め、花鳥風月の戯れ、詩歌管弦の様に、春秋を送りしに』……とそれから木曾のため一門が西海に落ち、再び一ノ谷にきたが、範頼義経に攻められ、皆散り散りとなり、生田川に破れたと物語をする。

後半は、子供との名残りで約束の時が過ぎたと、閻魔が怒り、使者を寄越す、そしてこの使者との戦い、このような苦しみを見せたが後をよく弔ってほしいと消え去る。とちよつと変わった曲である。

奴^{やつ}經

正^{まさ}

(卷七 經正の都落ち、青山の沙汰)

經正は、平家が寿永二年都落ちしたとき、五六騎の侍を連れて仁^に和^わ寺へ法親王にお暇乞いをしようと思った。それは幼い頃仁和寺の室の御所に、稚児^{もじ}として使えていた。經正はその日、紫地の錦の直垂に、ほかしの萌黄の鎧を着て、長覆輪^{ながふくりん}の太刀を佩き、切ふの矢を

※切ふの矢
鷹の羽の黒と白
がまだらをなし
ているのを切ふ
という

負い、滋藤の弓を持った姿であつたので失礼な姿であるからお目にかゝりたいが、御遠慮すると言ふのを、「構わぬ、その身なりで参るがよい」と仰せられた。

經正は宮に「先年下し候ひし青山、名残りは尽きず存じ候へども、さしもの我が朝の重宝を、田舎の塵になさん事の口惜しう候へば、参らせ置き候、都へ帰る事も候はば、その時、重ねて下し候め」と赤地の錦の袋に入れた御琵琶を差し出した。

そのとき行慶は小師であつた。

『經正』の曲のワキはこの行慶であり『これは仁和寺御室に使え申す僧都行慶にて候』といい、『さても平家の一門但馬の守經正は、いまだ童形の時より、君御寵愛なめならず候……また青山と申す御琵琶は、經正存生の時より預けくださった』といっている。

青山の琵琶の由来は、昔仁明天皇の御代の嘉祥三年の春、藤原貞敏が、大唐の琵琶の博士廉承武より、玄象、獅子丸、青山の三面の琵琶

琵琶を授けられたが、謡曲『玄象』に謡ふように、帰国の途中、竜神にとられ、二面を持ち帰り帝の宝物とした。

村上帝の聖代応和年間、帝が玄象で琵琶を弾じられているとき、廉承武の幻が現われ、青山をとり、三曲の秘曲のうち一曲を伝授した。しかしその後、誰も恐れて青山を弾ずるものはなく、仁和寺の宮のもとに置かれてあったのを、宮は経正を愛するあまりこの琵琶を授けられた。

青山と名づけられたのは、琵琶の背面は紫藤の木材で、表の撥面に夏山の峰の木の間から、有明の月が出る様が描かれていることからきている、世に稀な名器であった。

『経正』では、経正が今度の西海の合戦で討死したので、宮は管弦で弔わせられた。すると経正の亡霊が『手向け下さるゝ青山の御琵琶、婆娑にての御許されを蒙り、常は手慣れし四つの緒に、今も引かるゝ心ゆえ、聞きしに似たる撥音の、これぞ正しく妙音の』と

現われる。

曲は修羅物であるが、源平の戦物語ではない。

知章ともあきら（巻九 濱戦はまいくさのこと）

『知章』という曲は、謡曲二百番（曲）で、能を舞われることは少ない。私は見た記憶がない。西国からの僧そとが磯辺にたてられた卒都婆ばに頼朝故平こたいらの知章と書かれたのを見て、平家の一門の人の誰かのものだろうと回向をしていた。シテが出てきて『げにげに遠国の人にてましますば、知ろしめさぬは御理おんことわり、知章とは相国そうこく三男、新中納言知盛の御子息にて候、如月七日の合戦に、この一ノ谷にて討たれさせ給ひて候』という。そしてワキの問いに対して『さて知盛は、あれに見えたる釣船の程なりし、遙かの沖の御座船に、追いつき助

※相国…清盛

かり給ひて候……あれまで小舟に召されてか……いや馬上にて候ひし、
その頃井上黒^{いのうえくろ}とて屈強^{くつぎやう}の名馬たりしが、二十余町の海の面を、易々と泳ぎ渡り、主を助けし馬なり、されども船中に所なし間、乗する人もなくして、またもとの汀に泳ぎ上がり、この馬主の別れを慕ふかと思しくて、沖のかたに向かい高嘶^{たかいなき}きし、足掻きしてぞ立ったりける』と話す。その後、曲の後半は一ノ谷の合戦の様子を謡ふ修羅物であるが、平家物語では、新中納言知盛の郷は、生田の森の大將軍にておわしけるが、その勢、皆落ち失せ、討たれにしかば、御子武藏守知章、侍に監物太郎頼方、主従三騎、汀の方に落ち給ふところに敵おしかけ奉る、その中の大將と思しきもの、新中納言に組み奉らんとて、馳せ並ぶところに、知章は父を討たせじと、中に隔^{へだ}たりおし並べ、むずと組んで、どうと落ち取っておさへ首をかき、立ちあがらんとし給ふところを、敵の兵と落ち合わせて、首を取られる、監物太郎その兵を討つも、膝口を射貫かれ討死にす、とある。

※うかが

謡曲ではクセに『御座船を窺ひこの汀にうち出でたりしに、敵手繁

くかゝりし間、また引き返し打ち合ふほどに、知章監物太郎、主従

此処にて討死にする』と謡ふ。また、キリで『団扇の旗は兎玉の勢

か、物々しと言うまゝに、監物太郎が放つ矢に、敵は旗さしの、首

はねの
よか

の骨節深に射させて真つ逆様に、どうと落つれば、主人とおぼしき

武者、新中納言を目にかけて、駈け寄せて討つところを、親を討た

せじと、知章駈け塞がって、むづと組んでどうと落ち、取って抑へ

て首掻き切つて、起き上がるところを又、敵の郎等落ちあいて、知

章が首を切れば』と謡っている。その後、知盛が、沖の船に乗り移

り、子の討たれるのを見捨てたことを『知盛その時に、大臣殿の御前

にて、涙を流しのたまはく、武蔵の守も討たれぬ、監物太郎頼賢も

あの汀にて討たるゝを見捨てゝこれまで参ること、面目もなき次

第なり、如何なれば、子は親のため、命を惜しまぬ心ぞや、如何な

るおやなれば、子の討たるゝを見捨てけん、命は惜しきものなりと

※乗ろうと

て、さめざめと泣き給へば外の袖も濡れにけり、大臣殿ものたまはく、武蔵の守りはもとよりも、心剛にしてよき大将と見しぞとて』と自分の子、清宗の方を見て涙を流された。

謡の後半は平家物語と全く同じである。

通盛みちもり（巻九 落足のこと、小宰相こさいしやうのこと）

越前三位通盛は山の手の大將軍であつたが、引き連れていた軍勢は皆落ちたり、討たれた、弟の能登の守とも大勢に押し隔てられて離れてしまった。心靜かに自害しようと東に向かつて行くうちに、近江の国の木村三郎成綱、玉井四郎資景など七騎に取り囲まれて、遂に討たれてしまった。平家物語で通盛の討たれた様子はこれだけしか書かれてない。では謡曲では、キリのところに『あつばれ通盛も名ある侍もがな、討死にせんと待つところ、すはあれを見よ好き

敵に、近江の国の住人に、木村の源五重章が、鞭むちをあげて駈け來る、

通盛少しも顧がず、抜き設けたる太刀なれば、兜もつの、真向ちようと

打ち返す太刀にて差し違へ共に修羅道の苦を受くる』とだけである。

通盛の曲の特色は修羅物に前後ともツレの女を登場させることである。謡曲では出陣の前の日に、武人が愛妻との別れを惜しんだという平家の公達らしい優しさを現わして、しかも修羅物としての平家の武士の哀あはれさも表現しようとした物であろう。そのために前半ではツレ、ツレを漁翁ぎやうろうと女を登場させて小宰相こさいしやうの局の入水のさまを、

『さるほどに小宰相の局乳母を近づけ、いかに何とか思ふ、我頼わにも

しき人々は都に留まり、通盛は討たれぬ、たれを頼みてながらふべ

き、この海に沈まんとて、主従泣く泣く手を取り組みよなばたに臨み、さ

るにてもあの海に沈もうずらめ、……乳母泣く泣く取りつきて、

この時の物思ひ君一人に限らず、思しめし止まり給へと、御衣の袖に取りつくを、振り切り海に入る』と謡っているが、平家物語では

通盛の侍君太滝口時貞が主君の命で生き延び、その最後の様を小宰相の局に伝へる。小宰相の嘆きは一方ならず、四五日して、もしやの頼みも少なくなり、十三日の夜に、乳母に、出陣の前夜、これが最後の別れになるかと思ひ日頃は隠していたがお耳に入れたらたいそう嬉しそくに「通盛三十才になるまで、子と言うものがなかったが、同じ生まれるなら男子であると良い」と言われた。乳母は「たとへ身を捨てて蓮^{はす}へと思ひ召されても、必ず背の君と巡り合うとは限りません、それより静かに身二つになられせられ幼方を育てられます」とかきくどいた。乳母が少しうとうとした間に、そっと起きて、しづかに念仏をと^{もひろ}となへ、千尋の海に沈んだとあります。

小宰相の局は、上西門院に使へ、禁中第一の美人といわれ、十六才の頃、中宮亮であつた通盛に見染められた。始めは歌を詠み、文を頻^{ひんぱん}繁に通わたが、受けいられる氣配もなかった。通盛は最後の文を書き、小宰相の車に投げ入れた。小宰相は氣がついたが道へ投

け捨てゐるわけに行かず、袴の腰にはさみ御所へいった。場所もありに女院の前にこれを落とした。女院はこれを読まれ「あまり情けの強氣も、かえってあだになるものだ」と小野小町に心を掛ける人は多かったが、情けに強くて人になびかず、その報いで、百才の老婆となつても、一人あばら屋で、かろうじて露命をつないだという例をひかれた。お陰で三位は、美貌びぼうな女房を給わつて、幸福の花を手にし、お互いに深く愛し愛いされて西の海の舟にまで伴われ、遂に仲よく同じ帰らぬ旅に立たれた。と結んでゐる。

謡本に、同じ日の催能さいのうに『葵上あいのう』の曲があるときキリの文が『誦誦どくじ』

の声を聞くときは、誦誦どくじの声を聞くときは、修羅の苦患を滅して弘

誓ちかの舟に法の道、彼岸に早く到りつゝ成仏得脱じやうぶつとくだつの身と成り行くぞ有

難き身と成り行くぞ有難き』となるとあります。

千手 (卷十 千手の前のこと)

謡曲の『千手』のことを書く前に、ツレに出る一ノ谷で生捕られた
しげのろ重衡のことが平家物語に多く出てくる。

物語はさかのぼるが(巻五 奈良炎上) 治承四年都では、高倉宮を
奉じて頼政らが兵を起こしたとき、南都と三井寺の大衆が宮を受け
取り、或いはお迎へしようとした。これはみな朝敵行為である、よっ
て奈良をも討つべしと評定があった。この噂はたちまち伝わり、奈
良の大衆の騒ぎとなった。関白より奈良の僧徒へ「何事にても存ず
る旨あらば奏聞に及ぶべし」と使者を使わされたが、また毬杖※毬杖の玉
を「これこそ入道の頭」と名ずけて「打て、踏め」と囃はやした。

このような南都の騒ぎを静めようと入道相国は、妹尾三郎兼泰の五
百騎に「僧とは狼籍ろうぜきするとも、手出しはならぬ、弓矢などは帶すな」
と敕命した。そんなことは知らない南都の大衆は、この兵の六十余
人の首を斬り、猿沢の池の端にかけならべた。清盛は大いに怒り、

※毬杖
杖で玉を打つ
遊戲

さらば南都を攻めよと、大將軍に頭中將重衡に命じ四万余騎が奈良へ向かった。南都も奈良坂、般若寺二ヶ所の道を掘り切り、

を引きのべた。一日戦い夜になり、兩城郭共に落ちた。夜戦になり

重衡が般若寺の門の前に立ち「火をかけて明かりを取れ」というと兵が逆茂木さかもぎの木を割り、これを松明にして在家まゐに火をかけた。

この夜は風が強く、吹き迷う風に炎はひろがり、東大寺の大仏殿、興福寺、東金堂、西金堂など多くの伽藍がらんが焼失し、焼け死んだ人は三千余人に及んだ。二十九日重衡は南都を討ちしたがえて都へ帰った。このことがあり、重衡は最後に奈良に渡され斬られたとある。

重衡は、生田の森の副將軍であったが、ひきいる軍勢は皆落ちてしまつて後藤兵衛と主従二騎、助船に乘ろうと渚なぎさの方へ出るが、うしろより敵が追いつき船に乗り逃れる暇がない、湊河みなとがわ、刈茂河かりもを渡り板宿、須磨を通りすぎて西を目指して落ちて行く、追っていた梶原源太景季は追いつけそうもないので、もしやを頼みに遠くから矢を

射た。それが重衡の馬の後ろ足に突き刺さった。馬の弱るのを見て兵衛は一散に逃げた。重衡は馬は弱るし、海へ身を投げんとされたがそこは遠浅であつた。腹を切らんとされたところへ梶原より先に庄四郎義家が駆付け、自分の馬に乗せてつれ帰へった。

十四日、生捕りになつた重衡は、網代車あじろにのせられ、前後を土肥実平の兵に囲まれ、六条を東に引き回された。

法王の御所からの使いで「屋島に帰りたくば、一門の人に申し送り、三種の神器をお返し奉れ、さすれば屋島へ帰してつかわすとのこと意向である」といわれた。「宗盛以下重衡の命をもつても帰そうと言うものはないでしょう、しかし法王のお言葉ですので一度一門へ申し送ってみます」と使いを出したが、宗盛からは「法王が、亡父の忠節を思い下さるならば恐れ乍ら四国へご幸さるべきだと存じます。その時こそ我等一同は院宣いんげんを奉戴ほうたいして、会稽かいけいの恥はじをすすぐであります」と返事してきた。こうしたことは前から予想したことであつ

たが、しかしこれが都へ着いたので、いよいよ関東へ差し下されるにきまっていると思うと心細くなり、土肥次郎に「出家したいがいかがであらう」と申し出られた。

『千手』の曲では、奈良炎上のことを『口惜しや我一ノ谷にて如何にもなるべき身の生捕られ、今は東の果てまでも、かやうに面をさらすこと、前世の報いと言いながら、また思はずも父命により、仏像を亡ぼし人寿^{けんじう}を断ちし、^{げんとう}現当の罪を果たすこと、前業よりなお恥かしうこそ候へ』と謡ひます。

さて「街道下り」で重衡を鎌倉へ下そうと言うことになり、梶原兵三景時に守られて鎌倉へ下った。

謡曲では、このところは『げにや世の中は、定めなきかな神無月、時雨降りおく奈良坂や、衆徒の手に渡りなば、とかくにも果てはせで、また鎌倉に渡さるゝ、此処は何処ぞ八橋の、雲居の都いつかまた、三河の国や遠江、足柄箱根うち過ぎて、明けもやすらん星月夜、^{あしがら}

※現世の罪が現世
で報われること

鎌倉山に着きしかば』の数行であるが、平家物語では、山科の四の宮河原へきかゝると、蟬丸が庵で琵琶を引いた物語を、三河の八橋へきかゝると在原の業平のこと、池田の宿へ着くと

いかにせん都の春も惜しけれど

なれしあづまの花や散るらん

熊野の歌の老母を思ふ歌のこと、そうして清見が関、足柄峠をこえ鞠子川を過ぎ、七里が浜と魚がない旅といいながら、日数を重ねて鎌倉に着く様子が書かれています。

^{ぐさ}は千手の前の項になります。平家物語と謡曲とは大分異なります。

又、謡曲のツレの謡出で『身はこれ＊槿花＊一日の榮、命は＊蜉蝣＊の定めなきに似たり、心は蘇武が胡国に捕われ、岩窟の内に籠められて、

君辺を忘れぬ志、それは衛律が謀計にて、敵を亡ぼし＊舊里＊に帰る』

と謡うところは「股の湯王は、夏の桀王によって夏台にとらわれ、

周の文王は股の紂王のために＊羑里＊に捕われる」とある。

＊むくげの花

＊かげろう

＊支那の地名

さて頼朝は狩野介宗茂（福曲のワキ）に重衡を預けた。

狩野介も情けある人でいろいろと重衡をいたわり、湯殿を準備し入浴させたりします。その時に年二十才ばかりのたいそう美しい女性が世話します。「何事でもお望みがあれば、承ってきて伝えよと頼朝殿よりの仰せです」重衡は「このような身になり、何を望みましよう、ただ出家したいが望みです」

女性が頼朝に伝えると、頼朝は「この私の敵ならばともかく、朝敵としてお預かりしているものに出家など断じて許されるものではない」と一蹴した。出家のことは『いかに千手の前、昨日あからさまに申しつる出家の御暇のこと聞かまほしうこそ候へ、さん候その由申して候へば、朝敵の御事なるを私として、出家を許しもうさんこと、思ひも寄らずとこそ候ひつらめ』としている。

都では、土肥次郎の情深い心ぢしで法然上人に会わせてもらい、上人は出家しない人も戒律かいりつを守るとは当たり前ですと、剃刀かみそりを額に

※この女が千手です

あて、髪を刺る真似をして、戒律をあたへたとあります。

この後その日の夕方より雨が降りだした。

『今日の雨中の夕べの空、御徒然を慰めんと、樽を抱きて舞いりつ
つ既に酒宴を始めんとす、千手もこの由見るよりも、御酌に立ちて
重衡の、御前にこそは参りたれ、今は何時しか憚りの、心ならず
思はずも、手まず遮る盃の、心一つに思ふ思ひ、それそれいかに
何にても、御着にと勤むれば、その時千手とりあへず、羅綺の重衣
たる、情けなきことを機婦に妬む』これは、太宰府に流された菅原
道直作の一節で、綾織の薄物でさえ重く感じられ、これを織った機
織女の無情をうらむ…というのは、このように氣を遣って、おもて
なししているのに、どうして不機嫌でいらっしやるのかと意味を持
たせて歌った。『十悪というとも、引撰す』…十悪の罪人でも御仏
は浄土へすくいまいらす…と重衡も唱和した。

そしてもう一つと所望されると千手は『一樹の蔭や一河の水、皆こ

れ他生の縁と云う』と白拍子の舞歌を歌いました。重衡も興に乗じて、琵琶を弾かれた。

その後、重衡は南都に渡されて、斬られるのであるが、その途中で日野に住む女房の大納言の典侍殿てんじに会い、一時の別れを惜しんだ。南都に着き、木津河の辺で斬られ、その首は般若寺はんにやの門前にさらされたが、東大寺の俊乗上人が請い受けられ、日野へ送られた。

それを付近の山寺の法界寺で死体と共に荼毘だびにふし、骨を高野山に送り、墓は日野に建てた。

又、千手の局は、髪を切り黒染めの衣に姿を変え、信濃善光寺に隠れ住み重衡の後世の菩提ぼだいを弔った。

謡曲のクセのなかで『燈火暗うしては、数行虞氏すこうぐしが涙を』なんだの意味はむかし支那で漢の高祖と楚の項羽こうむとが帝位を争い、合戦七十二度に及んだが、その都度項羽が勝った。しかし最後の戦に負け、一日に千里を行くという驢すという馬にまたがり、寵愛ちゆうあいの後虞氏ごぐしを連れて逃

げ落ちようとしたところ、馬が動こうとしない。項羽は涙を流しながら「我が威勢は、もう^{すた}廃れてしまった。今は逃れようもない、敵の襲撃は物ともしないが、后のお前と別れるのが悲しい」と嘆かれた。夜も更け燈も暗くなってきたので、虞氏も心細くなって、涙を流された」というのが橘広相公が作られた詩である。

熊野⁺ (卷十 海道下り)

実は、三月十八日テレビの「熊、狂言鑑賞入門」で観世の家元の、『熊野』を見ていたら、解説で平家物語の巻十にあるが、いう話をされていた。熊野は平宗盛の愛妾である。巻十は平の重衡が鎌倉へ下るところである。

平家物語には、重衡が「池田の宿にも着き給ひぬ。かの宿の長者熊野が女侍従がもとに、その夜は三位宿せられけり。侍従、三位の中将を見奉つて「日ごろは傳^{つて}にだに思しめし寄り給はぬ人の、今日はおかゝる所へ入らせ給ふ事の不思議さよ」と一首の歌を奉る。

やゝあつて中将、梶原を召して「たゞ今の歌の主はいかなるものぞ。やさしうも仕つたるものかな」と宣へば、景時申しけるは「君は未だ知ろし召され候はずや。あれこそ屋島[※]の大臣殿の、未だ当国の守にて渡らせ給ひし時、召され参らせて、御寵愛候ひしに、老母これを留め置き、常は暇を申ししかども、給わざりければ、頃は弥生の

※平の宗盛
平治元年十
三才で遠江
守となる

初めにてもや候ひけん、

いかにせん都の春も惜しけれど なれし東の花や散るらん

※

という名歌仕り、暇を賜ってまかり下り候ひし、海道一の名人にて候」とぞ申しける、と書かれている。謡曲本には、宗盛の愛したの熊野の女侍従らしいが、曲では熊野としてしていると書かれている。

謡曲の『熊野』は、このことを元にして作られたものである。

あしきょう

熊野は平宗盛の愛妾で、都に住まいしていた。池田の宿に残っていた老母が病身で心弱くなり、召し使う朝顔に『暫しの御暇を賜りて、

しほ

今一度まみえおわしませ、さなきだに親子は一世の仲なるに、同じ

世にだに添ひ給はずは、孝行にも外れ給ふべし、ただ返す返すも命

の内に今一度、見参らせたくこそ候へとよ、老ぬれさらぬ別れのあ

りと云へば、いよいよ見まくほしき君かなと、古言までも思ひ出の

涙ながら書き留む』という手紙を持って行かせる。この手紙をワキ

の宗盛の所へ持ってゆき、読むのであるが、ここを『文の段』と云

※遊女

※この手紙の始め
「甘泉殿の春の夜の
の夢」は

漢の武帝が寵姫李夫人と愛りを結
めた甘泉殿の春の甘夢も、夫人の
死によって武帝傷心の種となり、
唐の玄宗が楊貴妃と興った驪山宮
の園かな晴らひも、遂に楊貴妃の
横死による悲しい時局がきた。

シテの謡の聞かせ所である。又、能の小書で『読次よみつぎの伝』では、手紙の途中からワキと一緒に謡ふ演出もある。

さて、その手紙を読み、暇を乞うたが、花見の供を強いられ止むな車に同車して、清水に行き、花見の酒宴に所望されて舞を舞う。

この道中の景色の様の謡は『四条五条の橋の上、老若男女貴賤都ろうじやくなんによきせんとも鄙色めく花衣袖を連ねて行く末の、雲かと見えて八重一重咲く九重の花盛り名に負う春の景色かな』『河原おもてを過ぎ行けば、急ぐ心のほどもなく、車大路や六波羅の地藏堂よと伏し拝む、……愛宕あたごの寺もち過ぎぬ、六道の辻とかや、げに恐ろしやこの道は、冥土へいどに通うなるものを心ぼそ鳥部山……こゝより花車、おりゐの衣裾はりまがた磨しふの徒路清水の仏の御前に、念誦ねんじゆして母の祈誓きせいを申さん』と実に良い文句である。

又、熊野が舞いを舞うクセの部分もすばらしく、クセの前半の一節には、平家物語の始めにある『祇園精舎の鐘の聲、諸行無情の響き

沙羅雙樹の花の色、盛者必滅の世の習ひ』と謡い、後半では『南を

だいひやうし

うすめ

遙かに眺むれば、大悲擁護の薄霞、熊野権現の移ります御名も同じ

今熊野、稻荷の山の薄紅葉の青かりし葉の秋また花の春は清水のた

ゞ頼め頼もしき春も千々の花盛り』と謡ふ。

舞の途中で俄に村雨が降り、花の散らすのを見て

いかにせん都の春も惜しけれど

馴れし東の花や散るらん

という歌を詠み、宗盛も哀れに思ひ暇を与える、これも清水観音の

御利生と喜び、東へ帰った。

能で『村雨留』の小書^{せうしよ}のときは、途中でを村雨の降る感じを出すた

舞いを短くするとか、『膝行留』では、歌を書いた短冊をワキに渡

す所作等、常の能より少し変わる所作がある。

謡では、『熊野』『松風』米の飯といわれ、いくら謡っても飽きない

と言われるほどの曲である。

※謡曲では
生者必滅と書
いている

藤戸 (卷十 藤戸)

觀世本に、吾妻鏡では元暦元年十二月七日と書かれているが、平家物語では寿永三年九月二十五日となっているから、平家物語によつたのであらうとある。

この曲は、藤戸の戦いで先陣の功によって備前の児島を賜^{たまわ}つた佐々木盛綱が、初めて自分の知行所へ来た。そして領民に訴えたいことあれば申し出よといったところより始まる。すると一人の老婆が、

『因果は巡る小車の、やたけの人の罪科は、皆報いぞと言ひながら、^{いんが}
^{とが}

我が子ながらもあまりげに、科も例も波の底に、沈め給ひし御情けなき、申すにつけても便なけれども、御前に参りて候なり』という。

盛綱は『なにと我が子を波に沈めし恨みとは更に心得ず』と聞いてみると、藤戸の合戦のとき、浦の男に海の浅瀬を教えてもらうが、下郎は安心ならない、又、他人にも話すかもしれんと、この男を殺した、その母であつた。

さて平家物語では、寿永三年九月十二日、三河の守範頼が平家を追討するため西国へ向かった。侍大将に土肥次郎実平、三浦介義澄、畠山庄司次郎重忠、佐々木三郎盛綱ら総勢三万余騎、都を立てて播磨の室津^{むろつ}へついた。

平家の方では、大將軍に小松の新三位中条資盛、侍大将に飛騨三郎左衛門景経、越中次郎兵衛盛嗣、悪七兵衛景清ら五百余艘の兵船が、備後の児島に着くというので源氏は室を出発して備前の西河尻、藤戸に陣をはった。

源氏と平家の陣の間は、海上五町ばかり、舟がないと渡れないので源氏の軍勢は向かいの山に宿陣して、空しく数日を送った。

九月二十五日（謡曲では三月^二十五日）の夜、佐々木三郎が浦の男一人を小袖や銀作りの短刀き与えて説き伏せ「この海を馬で渡る浅瀬はないか」と聞く。

ここからは謡曲と全く同じである。ワキの語りで

『さても去年三月二十五日の夜に入りて、浦の男を一人近づけ、この海を馬にて渡すべきところやあると尋ねしに、かの者申すよう、さん候河瀬かわせのやうなる所の候、月頭つきがしらには東にあり、月の末には西にあると申す、即ち八幡大菩薩の御告げと思ひ、家の子若党にも深く隠し、かの者ちたゞ二人夜に紛れ忍び出で、この海の浅みを見置き、てかへりしが、盛綱心に思ふやう、いやいや下郎すげは筋なき者にて、又もや人に語らんと思ひ、不憚ふびんには存じしかども、取って引き寄せ二刀刺し、そのまゝ海に沈めて帰りしが、さては汝が子にてありけるよな、よしよし何事も前世のことと思ひ、今は恨みを晴れ候へ』と語る。

翌二十六日、平家は小船を漕ぎ出して、「この海を渡ってこい」とからかう振う。佐々木盛綱は家来七騎と共に、さんぶと海に乗りいれた。

盛綱はどんどんと海を渡って行く、三河守はこれを見て「海は浅いぞ、渡れ、渡れ」と号令をかけると、三万余騎の大軍は皆に乗り入

れて海を渡った。平家も舟をつらね、散々に矢を射た。源平互いに乱戦となり、終日闘い続けて夜に入り、平家は沖へ、源氏は児島にさがり人馬の息を休めた。その後平家は屋島へ帰った。源氏は舟がないので追って行くことはできなかった。

「昔から今迄、馬で河を渡ったつわ者はあるが、海を馬で渡すことは珍しいことである」として、備前の児島を佐々木にあたへられた。

これが藤戸の戦いであるが、謡曲では曲の後半、盛綱はあまりにかの者は不憫である^{ふびん}と、弔いをする。その時、かの者の亡霊が現われ

「罪があればどんな重い罪科を受けるもしかたがないが、御弔いは有難けれども、恨みは尽きぬ妄執^{もうし}を、申うさんために来たりたり」とあらわれる。そして『藤戸の渡り教えよと、仰せも重き岩波の、

川瀬の様なる浅みの通りを、教えしまゝに渡りしかば、弓矢の御名をあげるのみか、昔より今に至るまで、馬にて海を渡すこと、稀代^{まれたい}

の例なればとて、この島をご恩に賜るほどの、御喜びも我ゆえなれ

ば、如何なる恩をも、賜ふべきに』と恨む。

この後、この曲の一番の見せ所、聞かし所である、かの男が殺された場面、そして最後に弔いの法を聞き、成仏して行く所がある。

少し長いがそこを書きますが、このところは、所作も見応えがあり、謡のリズムが良い。

前の賜ふべきにの、あとは『思ひのほかに一命を、召されし事は馬にて、海を渡すよりも、これぞ稀代の例なる。さるにても忘れがた

や、あれなる、浮洲の岩上に我を連れて行く水の、氷のごとなる

刀を抜いて、胸の当たりを、刺し通し、刺し通さるれば肝魂も、消

え消えと、なるところを、そのまゝ海に押し入れられて、千尋の底

に沈みしに、折節引く汐に、引かれて行く波の浮きぬ沈みぬ埋木の

岩の、狭間に流れかゝって、藤戸の水底の、悪龍の水神となって恨

みをなさんと思ひしに、思はざるに、御弔いの、御法の御舟に法を

得て、即ち弘誓の舟に浮かめば水馴棹、さし引きて行くほどに、生

死の海を渡りて願ひのまゝに、やすやすと、彼の岸に、到り到りて
じよぶつ けたつ

成仏解脱の身となりぬ、成仏の身とぞ成りにける』と謡って終わる。

屋島の合戦（平家物語卷十一）

さて「屋島」の話になるのですが、平家物語に元歴二年正月、義経院参して「平家は神明にも放たれたり、君にも捨てられ参らせはて、都を出、波に濺ただよう落人おもうどとなれり、今度義経は鬼界きがい、高麗こうらい、天竺てんじく、震旦しだんまでも平家を攻め落とさざらん間は、王城へ帰るべからざる」と法皇に奏聞され、宿所に帰り東國の侍たちに向かつて「今度義経院いん宣せいを承り鎌倉殿の御代官として、平家を攻め亡ぼすべし陸は駒の足のかよはんを限り、海は櫓ろのたたむ所まで攻め行くべし」とこそ給いけれ、と命じます。

能の『安宅あたく』や『正尊しょうそん』『舟弁慶ふなべんけい』に

『渡辺にて梶原が逆櫓の意見を承引し給はざりし遺恨いこんにより』と出てきますが、これは、今の大阪市上福島に舟を揃へます。その日は北風が激しく吹き、大波で舟を出すことができず、大名小名寄り合ひようじようい評定したのです。梶原が「今度の合戦には、舟に逆櫓を立て候ば

※舟を漕ぐ櫓を前にも付け前にも後ろにも舟が進むようにする

や、馬は駈けんと思へば駈け、引かんと思へば引き、弓手※へも馬手※

※左
※右

へもまはしやすく候。舟はさよりのとき、きつと押しまわすが大事にて候へば、舳艫※に櫓かじをたてちがへ、わい櫓を入れて、どなたへも安う押しまわすやうにし候はばや」と申しければ判官「先ず、門出のあしさよ、梶原の舟に逆櫓をたてうとも、義経はただ元の櫓にて候はん」云々とありとあります。

さて、酒肴しやくして祝い、舟に兵糧ひやうりやう、武具などを積み、「舟とう仕つかまつれ」

と命じたが、水手糧取供すいしゅかんとりが「順風には候へども、普通に過ぎたる風にて候、沖はさぞ吹いて候ふらん」と申しければ、義経大きに怒り「沖に出でぬる舟こわければとて、留まるべきか、野山の末にて死に、海川に溺おぼれて失するも皆是先世の宿業しゆくごふなり、ただのときは敵も恐れて用心すらん、かかる大風大波に思ひも寄らぬところへ寄せてこそ思ふ敵をば打たんずれ」と打ち出した。このところこそ『舟弁慶』で『その上一年渡辺福島を出でしときは、以っての外の大風なりし』

※舟のへさきととも(前接)

に、君御舟を出し』と謡っているのです。

二月十六日（牛の刻）に福島を出、翌日（卯の刻）に阿波の地に着きました。ここから屋島に行くのですがその間のことは謡にはありませんし、あまり関係がないので省略します。

さて屋島での合戦の様子を謡ったのが『屋島』です。この曲は勝ち戦の曲として能でよく舞われます。

この屋島の曲は平家物語によったもので、巻第十一「屋島軍」の始めに「判官その日の装束には、赤地の錦の直垂に、紫裾濃の鎧着て、^{くわがた}鉄形打ったる兜の緒をしめ、金作りの太刀を佩き、二十四さいたるきりふの矢負い[※]滋籐の弓を真中取り、沖の方を睨まへて、大音声を上げて、一院の御使い、檢非違使從五位の尉源義経と名乗る」とありますが、能の『屋島』にも全く同じように謡はれています。

ています。

この曲は西国行脚の僧が屋島の浦で一夜を求め、その老漁師より屋

※鎧の威糸の色

目で上は白く
次第に裾が濃
い紫になった
もの

※二十四本の

※弓の幹を籐
で巻いた弓

島での義経の大將振り、悪七兵衛景清と三保の谷四郎の銀引、佐藤
繼信の最後など、合戦の様子を聞きます。

この様子は『いでその頃は元暦元年三月十八日のことなりしに。』

平家は海の面一町ばかりに船を浮かめ、源氏はこの汀にうち出給う。

大將軍の御出立には、……先の平家物語の通り……その時平家の方

よりも、言葉戦ひ事終わり、兵船一艘漕ぎ寄せて、波打ち際に下り

たつて陸の敵を待ちかけしに、源氏の方にも続く兵五十騎ばかり、

中にも三保の谷四郎と名のつて、真っ先かけて見えし処に、平家の

方にも悪七兵衛景清と名のり、三保の谷目がけて戦いしにかの三保

の谷はその時に、太刀打ち折って力なく、少し汀に引く退きしに景

清追っかけ三保の谷が、着たる兜の銀を掴んで、後へ引けば三保の

谷も、身を遁れんと前へ引く、互いにえいやと引く力に、鉢附けの

板より引きちぎって左右へくわっとぞ、退きにけるこれを御覧じて

判官、お馬を汀に打ち寄せ給へば。佐藤繼義矢先にかゝつて馬よ

※銀の第一枚目

り下にどうと落ちつれば、船には菊王も討たれければ、共に哀れと思しけるか、船は沖へ陸は陣に相引きに引く汐の後は関とぎの音絶えて」と謡っています。

平家物語には「佐藤繼信の討死に（繼信の最後のこと）菊王の討死にのところは、能登殿、さしつ引きつめ散々に射候へば、矢庭に鎧武者十騎ばかり射落さる。中にも真っ先に進んだる奥州の佐藤三郎兵衛繼信が弓手の肩より馬手の脇へつと射ぬかれ、しばしもたまらず馬より逆さまにどうと落つ、能登殿の童に、菊王丸と言う者、萌黄緘の腹巻に、三枚甲の緒をしめ、打物の鞘をはづし、三郎兵衛の首をとらんと走りかかる。弟の四郎兵衛忠信、そばにありけるが、兄の首をとらせじとよっぴりひやうと放つ。草摺りのはづれをあなたへつと射ぬかれて犬居（四ッん這い）に倒れぬと書いてある。

そして後半に、有名な弓流しの場面をがあまります。【その時何とかしたりけん、判官弓を取り落とし、波に揺られて流れしに、その

折しもは引く汐にて、はるかに遠く流れ行くを、敵に弓を取られじと、駒を波間に泳がせて、敵船近くなりし程に、敵はこれを見しよりも、船を寄せ熊手に懸けて、既に危く見え給ひしに、されど熊手を切り払い、ついに弓を取り返し、元の渚にうち上がれば』と、自分分は弓が惜しいためでなくその弓を見て義経は小兵だと思われたくないためだと答えたとあります。

能で弓を取り落として敵前にこれを捨うという「弓流し」という特別な所作があります。

弓流しのところは、源氏の兵うちいれ打ち入れ攻め戦ふ。舟のうちより熊手をもって、判官の甲のしころにからりからりと二三度打ちかかれれば、判官如何がはせられけむ、弓を掛け落とされぬ。うつむき鞭をもって掻き寄せて、とらうとらうとし給へば、御方の兵共

「ただ捨てさせ給へ捨てさせ給へ」と云ひけれども、終にとって笑つて帰られける。老武者が「千疋万疋にかへさせ給ふべき御だらし

なりとも、御命にはかへさせ給ふべきか」と云ひければ、判官「弓の惜しきにとらばこそ、もし叔父為朝が弓の様ならば、態とも落としてとらすべし、「これこそ源氏の大將軍源九郎義経が弓よ」など嘲弄せられんことが口惜しければ、命にかへて取るぞかし」といふ能で義経がシテ（主役）として出てくるのはこの曲だけです。

前半のシテは漁翁でしたが、後半は義経（の幽霊）です。そして靈魂はこの世とあの世の生死の海に漂たふよっていると云って屋島の合戦を語ります。このように義経一代の中でも最も華やかな戦であったのを取り上げているのだと思われます。そして夜明けと共に消え去ります。

また、この合戦で童話などに出ている那須の余市の話（巻十一那須余市の事）は謡には出てこません。

一日戦い終わり、平家の舟は沖に、源氏は陸に陣を取った。

源氏の兵は、一昨日福島を出、大風大浪にゆられ、昨日阿波の国勝

浦につき、戦いをし、終夜中山越えをし、今日一日戦い、人も馬も
疲れはてゝいた。平家の方は、能登殿その夜夜討せんと支度せられ
たが、越中次郎兵衛と海老次郎の先陣の争いがあり、空しく明けた。
寄せたりなば、源氏なじかはたまるべき。寄せざりけるこそ、せめ
て運の極めなれ。と平家物語にある。

屋島の合戦は三月十八日であったが、渡辺、福島に残った二百余艘
の舟は、梶原が先として二十二日に屋島に着いた。しかしすでに戦
いは終わっていた「六日の菖蒲、會にあわぬ花」と笑われた。

その意味は、「五月五日の節句に間に合わない菖蒲、會：法会に間
の合わない花」という事で、時期に遅れて役に立たないと言うことを
いう。

先に出てきた佐藤繼信の討死にの様子、景清の鍛引きなどの合戦の
様子については、謡曲で『景清』はあるが、佐藤繼信としては特に
ないが、『撰待』^{せんだい}という曲で、井慶が繼信の母に語るところがある。

この二曲とも、平家物語にはない。

景 清

この曲は、別名「盲目景清」とも呼ばれるそう、景清は平家物語でも、壇之浦の戦いではあまり出てこないし、『景清』の曲でも屋島の戦いの様を曲の最後に謡ふ。景清は壇之浦の戦いでは、いず方へか落ちたと書かれてある。それが『景清』の曲では宮崎に落ち、

盲目の身となり、日向の勾等こうとうと名をつけて隠れ住んでいた。

曲は鎌倉龜ヶ谷に住む、人丸という景清の娘が、宮崎に父がいると風の頼りに聞き、尋ねて行く。そこで一軒の薬屋わらやで、流され人の悪七兵衛景清を知らないかと尋ねと、私は盲であるし見たこともないし、知らないと答へる。娘が去った後、景清は、独言で『不思議やな只今のものを如何なるものと存じて候へば、この盲目なるものの子にて候は

如何に、我一年尾張の国熱田にて遊女と相慣れ一人の子を儲く、女子なれば何のように立つべきぞと思ひ、鎌倉龜ヶ谷の長に預け置きしが、馴れぬ親子を悲しみ、父に向かつて言葉を交はす、声をば聞けど面影を見ぬ盲目ぞ悲しき、名のらで過ぎし心こそなかなか親の絆なれ』と親子の情を謡ふ。

その後、娘は里人にあい、景清のことを聞くと、いま来られた道に藁屋があつたでしょう、そこに景清が居たのだと教へられる。そこには盲人しか居らなかつたという、それが景清だと言われる。里人は父に会いたがつている人丸を哀れに思ひ、二人を対面させる。景清は『かしましさとまじさなきだに、故郷のものとして尋ねしを、この仕儀なれば身を恥じて、名のらで帰す有様』と心の寂しさを謡ふ。

その後『日向とは日に向ふ』と謡うが、文章も、節も、又、その感じを表現する緩急の面白い一節がある。

また『御身は花の姿にて、親子と名のり給ふならば、殊に我が名も

顯るべしと、思ひ切りつゝ過ごすなり』この親子の哀れさを謡ひ、娘の希望で屋島での高名を様子を話して聞かす。

『いでその頃は寿永三年三月下旬のことなりしに、平家は船源氏は兩陣を海岸に張って、互いに勝負を決戦と欲す、能登の守教経宣

ふより、去年播磨の室山、備中の水島嶋越えに至るまで、一度も味

方の利、無かつし事。偏に義経が謀計いみじきに因つてなり、如何

にもして九郎を謀計こそあらまほしけれと宣えば、景清心に思ふお

う、判官なればとて鬼神にてもあらばこそ、命を捨てば易かりなん

と思ひ、教経に最後の暇乞ひ、陸に上がれば源氏の兵、餘すまじと

て駆け向ふ、景清これを見て、景清これを見て、もののしやと、

夕日影に、打物ひらめかいて、切つてかゝれば休らへずして、刃向

いたる兵は四方へばつとぞ逃げにける遁さじと、さもうしや方々よ、

源平互いに見る目も恥ずかし、一人を、とめん事は案の打物、小脇

に挿込んで、なにがしは平家の侍悪七兵衛、景清と、名のりかけ名

のりかけ手取りにせんとて追うて行く、三保の谷が着たりける、兜しころの鍔つばを、取り外し取り外し、二三度、逃げ延びたれども、思ふ敵かたきなれば通さじと、飛びかゝり兜をおっ取り、えいやと引く程に鍔は切れて、此方に留とどれば主は先へ逃げ延びぬ、遙かに隔てゝ立ち帰りさるにても汝、恐ろしや、腕の強きと言ひければ、景清は三保の谷、頸くびの骨こそ、強けれと笑ひて、左右たぎと退きにける』と屋島での景清と三保の谷の戦いぶりを謡っている。

根ね 侍たい

これは平家物語にはない。これは壇之浦で平家を滅ぼした義経が、梶原の讒言ざんげんによって、都落ちをし、奥州の藤原秀衡をたより落ち行く道中で、岩代いわしろの国信夫のぶ（福島県、会津付近）で、屋島で討死にした佐藤繼信の母と子の鶴若の接待を受け、その時に并慶が屋島の合戦における佐藤繼信、忠信の働きを物語る。

『さても屋島の合戦、今は斯うよと見えしに、門脇殿の次男能登の
守教経と名乗って、小船に取り乗り磯間いそま近く漕ぎ寄せ、いかに源氏
の大將源九郎義経に、矢一筋まゐらせん受けて見給へとのゝしる。

かり申す各々を初めとして、みな御矢面に立たんとせしが、何とや
らん心怯こころおそくれたりし処に、継信は心勝りの剛の人にて、お馬の前に

駆け寄よがって、義経これに在りやとてにっこりと笑ひて控へたり、

さてその時に、教経は、引き設おけたる弓なれば、矢坪やつばを指してひや

うと放つ、あやまたず継信が着たりける、鎧の胸板押付揚卷おしつけあけまき、かけ

ずたまらずつゝと射通し、後に控へ給ふ我が君の、御着脊長の草摺

にはったと射留とどむ、さてその時に継信は、馬の上にて乗り直らん乗

り直ならんとせしかども、大事の手なればこらへずして、馬より下に

どうと落つ、やがて我が君お馬を寄せて、継信を陣の後ろに昇あかせ、

いかに継信、いかにいかにと宣えども、たんだ弱りに弱って遂に空

しくなる『あら愚かや忠信は、日の下に於いてかくれましまさず、

※矢を射込む
狙い所

能登殿の童菊王丸、繼信が首を目がけ、渚^{なみ}の方に走りわたるを、忠
信引いてはなつ矢に、菊王が真中射通されかっぱと転へば、教経舟
より飛んで下り、菊王が綿嚙^{＊わたがし}掴んで、遙かの船に投げ入れ給へば、
程なく船にて空しくなる、眼前の兄の敵をば、弟の忠信こそ取って
候へ』と謡ふ。

『屋島』では義経の弓流しを、『景清』は、景清と三保の谷の争い
を、『摂待』では、佐藤繼信忠信兄弟の働きをと、謡うのである。

現曲として謡にはないが、屋島の合戦の前に巻十横笛の事以下で、
重盛の子、維盛のことが書かれている。小松の三位の中將維盛の郷
は、身は屋島にありながら心は都へ通われたり。故郷に留めおきし
北の方、幼き人の面影のみ、身にひしとたち添ひて、忘るゝ暇もな
かりければ、あるにかいなき我が身かなとて、寿永三年三月十五日
屋島を紛れ出で、紀伊の湊^{みなと}から山伝いに高野山へ行かれた。其処で
知り給へる聖^{ひじり}に会われ、知覚上人に髪をおろしてもらい出家された。

※鎧の左右の肩
にあたる部分

そして高野をたたれ、熊野へ向かわれ、三つの御山を参詣し瀆の宮より船に乗られたが、その沖に山なりの島というところで、「祖父太政大臣平朝臣清盛公法名浄海、親父小松内大臣左大将重盛公法名浄蓮、三位の中将維盛法名浄圓、じょうれん
これより年二十七歳、じょうれん 寿永三年三月二十八日、那智の沖にて入水す」書き置いて、沖へ出て入水された。

碇いかり 潜かす（卷十一 壇の浦の合戦）

義経は、屋島でうち勝ち、周防の地へ押し渡り、範頼と一つになります。

「源氏の舟は三千余艘そう、平家の舟は唐船からぶね少々交われり。さる程に、元歴二年三月二十四日の卯の刻に長門の国赤間あかまが関、壇之浦にて源平の矢合やあひとぞ定めける。判官と梶原とどし軍既に戦いくさせんとす、梶原申しけるは「きょうの先陣をば景時にたび候へかし」判官「義経なくばこそ」梶原「まさなう候殿は大將軍にてましまし候ふものを」判官「其は思ひも寄らず、鎌倉殿こそ大將軍よ、義経は奉行を承つたる身なれば、ただわ梶原と同じことぞ」と宣へば、梶原先陣を所望しかねて「天性此の殿は侍の主にはなり難し」とぞつぶやきける。判官「日本一のおこの者かな」とて太刀のつかに手をかけ給ふ。梶原も「鎌倉殿よりほかは主をもち奉らぬものを」とて、これも太刀のつかに手をぞかけける。されど判官には三浦介取りつき奉り、

梶原には土肥次郎つかみついて、両人手をすって申しけるは「これ程の御大事を前にかかへながら、どしいくさ候ひなば、平家勢いつき候ひなんず、かつは鎌倉殿の帰り聞こし召されん所も穩便やんべんならず」と申しければ、判官しづまり給ひぬ。梶原も進むに及ばず。と言うことで、どうもこの二人は気が合わなかったようです。

平家物語にはこの合戦の様子が詳しく書かれているが、両軍の間は海の面僅おもてかに三十余町の隔たりである。門司、赤間、壇の浦は、潮の早い急流であった。平家の船は心ならずも潮に向かって押し流される。源氏の船は潮に乗っておって出た。沖は潮の流れが速いので、梶原は汀に船をつけて、行き違ひ船を熊手にかけて引き寄せ、つぎつぎと敵の船に乗り移りながら、親子主従打ち物をふるい、散々に敵を薙なぎ倒した。その日の高名の一の筆に記された。

謡曲には、平家の最後の様子を謡った曲に「碇瀬」という曲があります。

『碇潜』という曲は、旅の僧（平家の所縁のもの）が一門の者を引うために長門へ来ます。そこで舟夫から壇之浦の合戦での教経の奮戦の様子、義経の所謂八雙飛びなどを聞き、曲の後半では平知盛の亡霊が現われが、知盛が碇を兜の上に戴き最後遂げる有様を見せると全く合戦ものであります。

【さてもこの壇之浦の合戦、門脇殿の次男、能登の守教経小船に乗り乗り大長刀を莖長に取り延べ、此処彼処を薙給ふにぞ、兵多く亡びにけり、その時新中納言使者を立て、せんなき能登殿の振舞かな、さればよき敵にてもあらばこきと宣ひければ、さてはこの言葉は、大将と組めと言うことにてやあるらんとて、敵の船に紛れ入り、九郎判官を尋ね給ふ、如何がはしたりけん判官の船に 乗り移りぬ能登殿喜び打って懸かる、判官これを見て、敵はじとや思ひけん、長刀脇にかい挟んで、二丈ばかりの味方の船にゆらりと飛び乗れば、教経はせん方もなく、長刀投げ捨て後見送りて怒りをなしてぞ立つ

※柄長く

たりける。ものものしのおのれ等に太刀も刀もいるまじや、いざや冥土の供に連れんと、左右の腕をさし出し、彼らを握んで引き寄せて、左右の脇に挟んで波の底に沈みけり」と先ず教経の最後を謡っている。

ついで『源氏の軍兵その数、浮かみてかの御座船には目もかけず、たゞ兵船にぞかゝりける、平家の公連きんたもろじく艦舳に立ち渡り矢先をそろへ、切先を竝べて寄せ来る敵を待ちかけたり、中にも知盛進み出で、大長刀を莖長に取り延べ、左を藉ては右を払い、多くの敵を亡ぼしけるが、今はこれまで沈まんとて、鎧二領に兜はね、なほもその身を重くなさんと、遙かなる沖の碇大綱えいやえいやと、引き上げて、兜の上に、碇を戴き、海底に飛んでぞ入りにける』と知盛の最後を謡っている。この後半を次のように謡ふこともあります。

ワキ『さても我夜も静かなる折節に、この海際うみぎはの辺にて、平家の跡を弔う処に、不思議やな今までは無かりし大船浮かみ出で、さも

早瀬の海なれども流れもやらず漕ぎもせず、潯陽の江のほとりなら
ねど、舟船のなかにて彈ずる秘曲、松風にも岩越す波にも、更に紛
れぬ琴の爪音、あら不思議のことやな、一いかに大納言の局、今宵
は波も静かなれば月を覧らんあらんとの御事なり、あの苦取とれと申せ、
櫂かじ枕まくら、せめては月を松風の、吹くもよしなや苦取りて、夜舟に月を
待とりよ、それ身を觀かんするときは岸上がんじょうの草、命を知れば江のほとり
に、繫がざる舟、さるほどに壇の浦の合戦、今は頼みもなかりしか
ば、新中納言知盛、二位殿に向ひ宣いまはこれまで候、御傷はしな
がら行幸を、波の底になし参らせ、一門供奉ぐふし申すべしと、涙を抑
へて宣へば、二位殿は聞きここし召し、心得て候とて、しづしづと立ち
給ひ、今はの出立いでたもとおぼしくて、白き御袴はかまのつま高り召されて、神
靈じんを脇に挟み宝剣ほうけんを腰にさし、大納言の局に内侍所を戴いたかせ、皇居
に参り跪つまずき、いかに奏聞申すべし、この国と申すに逆臣多きところ
なり、見えたる海の底に龍宮と申して、めでたき都の候行幸をなし

申さんと、泣く泣くそうし給へば、さすが恐ろしと思しけるか、龍
顔に御涙を浮かめさし給ひて、東に向はせおはしまし、天照大神に
御暇申させ給ひ、その後西方にて御十念おんじゅうねんも終わらぬに、二位殿歩み
寄り玉体を抱き目をふさぎて波の底に入り給ふ、恨めしかりし事ど
もを、語るもよしなや跡弔あととづへや僧達と、夜るすがらくどき給ふひし
に、にわかにかき曇り、虚空こくうに関との声聞こゆ』

これだけ異なることを謡う曲も珍しい。文章としては後のほうが面
白が、碇潛の曲名では相応しくないと思ふ。

長々と謡曲の文を書いたのは、壇の浦の戦いの様は、平家物語より
謡曲のほうがよく表現されているようだ。

このように平氏の一門はみな波の底に消えたのです。

女院も海にいらせ給うが、源氏の舟、漕ぎ寄せて熊手にかけて、引
き揚げる、また、大納言の典侍局、神靈しんじのはいった唐櫃からびつをとって海
に入らんとし給ふが、武士ども取り留める。平大納言時忠は生捕ら

れていたが、時忠の申出で義経元のごとく収められ、神璽は無事であつた。

生捕られたものは、宗盛、時忠、清宗ら三十八人と女院、北の政所、大納言の典侍殿ら四十三人と伝へられる。

大原御幸

(灌頂かんじやうの巻 小原御幸)

平家物語では、巻十二の後の灌頂の巻と平家物語の最後のところである。謡曲では、出家された建礼門院が、大原の寂光院へ住まわれた。文治二年（壇之浦の合戦の翌年）御白河法皇は、賀茂の祭りの後、大原に行幸なつた。謡曲の『大原御幸』は、このとき建礼門院から壇之浦の合戦の話、安徳天皇のご入水のことなどをお聞きになるところを謡つたものである。

建礼門院は、京へ帰り初めは東山の麓かもとの吉田の辺の住み荒れた、庭

は草深く、軒にはしのお茂り、簾も絶えたような住いであつた。

昔は玉の臺をみがき、錦の帳に纏われ、明かし暮らせ給ひしが、今はありしとしある人にも皆別かれ、憂かりし波の上、舟の中の御住ひも今は恋しうぞ思し召された。

かくて女院は文治元年五月御髪を下ろさせ給ふうた。

女院は十五歳にて女御の宣旨を蒙り、十六にて后妃の位に備わり、二十二にて皇子誕生あつて、皇太子に立ち、皇位におつきになつたので、院号を賜り建礼門院とぞ申しける。入道相国の御娘なるうえ天子の母にてもましませば、世の重うし奉ること斜めならず、今年二十九にぞならせましましける。

文治元年長月の末に、かの寂光院に入らす道すがら、まがきの菊のかれがれに、うつろう色を御覧じても御身の上とや賞しけん、かの仏御前の墓所へ参られ、祈り給ひけり。

かゝりし程に、法皇は賀茂の祭りの後、卯月二十日余りの頃小原に

行幸なつた。「西の山の麓ふもとに一字の御堂あり、これ寂光院なり、薨いら破れては霧不斷の香を焼き、扉落ちては月常住ともしづの燭かしこを挑ぐ」という様なところであつた。「庭の青草茂り合ひ、青柳糸を乱りつゝ、池の浮草波に漂ひ、錦を曝さらすかと疑はる、八重立つ雲の絶え間より、山ほととぎすの一声も、君の御幸を待ち顔なり」謡も同じ文章である。法皇これを御覧あつて

池水にみぎわの桜散り敷きて

波の花こそ 盛りなりけれ

と一首くちづさまれ「古りにける岩の絶え間より落ち来る水の音さへ、由ありて緑羅の垣、翠黛の山、絵にかくとも筆も及び難し。

謡では、この処を『かくて大原に御幸なつて、寂光院の有様を見渡せば、露結ぶ庭の夏草茂りあひて、青柳糸を乱しつゝ、池の浮草波に揺られて、錦を曝すかと疑はる、岸の山吹咲き乱れ、八重立つ雲

の絶え間より、山郭公の一声も、君の御幸を、待ち顔なり、法皇池

中を揺ると聲す

まいらん

のみぎはを観覧あつて、池水にみぎわの桜散り敷て、波の花こそ盛りなりけれ、古りにける、岩の絶え間より落ち来る、水の音さへ由ありて、緑羅の垣、翠黛の山、絵に描くとも筆にも及び難し、一字の御堂あり、覺破れては霧不斷の香をたき、樞落ちては月もまた、常住の燈火を挑ぐとはかゝる所か物憂や』『これなるこそ女院の御庵室にてありげに候、軒には蔦、朝顔這いかゝり藜じより深く鎖せり、あらものすごの気色やな』とほゞ同じ文章です。

法皇、「人やある、人やある」と召されけれども、御いらへ申す者なし、やゝあつて老い衰へたる尼一人参りたり。「女院はいづくへ御幸なりぬるぞ」と仰せければ、「この上の山へ、花摘みに入らせ給ひて候」と申す。「そも汝はいかなる者ぞ」と仰せければ、「申すにつけて憚り覚え候へ度も、故少納言入道信西が娘、阿波の内侍と申すものにて候なり」。法皇は女院の御庵室に入らせられると、その一間には来迎の三尊が祭られ、色紙に大江定基法師の詠じた、

「せい笙歌遙かに聞こゆ孤雲の上、聖衆来迎す落日の萌」と書かれてあつた。この句は『大原御幸』の『寂光院』の小書がついたときに謡われる。

やゝあつて濃き黒染めの衣着た尼二人、岩の懸路を傳ひつゝ帰つてこられた。法皇「あれはいかなる者ぞ」と仰せければ、老尼涙を押えて「花籠臂にかけ、岩つつじを持たせ給ふは女院にてわたらせ給ふ、爪木に蕨折り添へて持ちたるは中納言維実の娘、五条大納言国綱の養子、先帝の御乳母、大納言の典侍の局なり」と申された。

この辺りは謡曲も全く同じ文章である。平家物語の良い文章は、そのまゝ謡曲に取り入れている。『一年の窓の前には、撰取の光明を期し、十年の柴の樞には、聖衆の来迎をこそ待ちつるに、思ひの外御幸かな』の後、平家物語と少し異なり、大原の里の四季の様ロソギ（シテとち謡の掛合い）で謡う。

女院は重ねて申さ給ひけるはからは、平家物語も謡曲も平家一門が

西海に落ち、最後には、皆々大海に沈み沈み果てた様を書かれ、語っている。文章は前の用に同じ文ではないが、いづれも口調の良い、うつくしい文章である。何れも長いので割愛する。

正尊 (卷十二土佐坊斬られ)

さて義経は京へ凱旋したのですが、元歴二年五月、大臣親子を連れ鎌倉へ向かいました。しかし先に鎌倉へ帰った梶原景時が頼朝に讒奏したので鎌倉の七里浜付近に闇を作り、大臣親子を受け取り、義経は鎌倉の東南片瀬へ追っ捕された。「正尊」に「義経を鎌倉へも入れられず。道より追い返へされし事」と謡はれているのです。

この後の曲は「正尊」になるのですが、平家物語は、卷十二土佐坊誅(きられ)になっています。

謡の「正尊」は平家物語の「土佐誅」の項とほとんど同じです。

「さる程でに、九郎判官には、鎌倉殿より大名十人付れられたりけれども、内々御不審蒙り給ふ由聞こえしかば、心を合わせて一人づつ皆下り果てにけり。兄弟なる上、殊には父子の契りをして去年の正月木曾義仲を追討せしよりこのかた、たびたび平家を攻め落とし、今年の春滅ぼし果てて一天を静め、四海を澄ます。勸賞行はるべき

※上の人に他人の事を告げ口する

所に、いかなる子細かあつてか、かかる聞こえあるんと、上一人をを始め奉て、下萬民に至るまで不審ふしんをなす。

このことは、去んぬる春、摂津国渡辺より船汰ふなせらへへして八島へ渡り給へひしとき、逆櫓いさたてうたてじの論をして、おゝきにあさむかれたりしを梶原遺恨いこんに思ひて常に讒言ざんげんしけるによつてなり。定めて謀反むはんの心もあるらん、大名共差し上せば、宇治・瀬田の橋をも引き、京中の騒さわぎとなつて、中々あしかりなるとて、土佐房昌俊を召して、「わ僧ものしうで上つて物詣ものもとでする様にて、たばかりで討うて」と宣のたまひければ昌俊畏かしこまつて承る。宿所へも帰らず、御前をたつてやがて京へぞ上りける」とまずあります。

重複するようですが、謡の「正尊」では、曲の初めにワキ(弁慶)が、『さても我が君判官殿は、鎌倉殿より大名十人つけ申されて候へども、内々御仲不和になり給へふにより、心を合わせて一人づつ皆下り果てて候。さても去年の正月木曾義仲を追討せしよりこのかた、

たびたび平家を攻め落とし、今年の春波ほし果てて一天を静め、四海を澄ます勸實行はるべき所に、渡辺にて梶原が逆櫓の意見を承引し給ふはざりし遺恨いこんにより、和が君を譴奏さんそう申し、御仲不和になり給ひて候』以下略。その後も同じ文章がよく出てきます。

さてこの正尊という曲の物語は、正尊は都へ着いたのですが次の日まで義経のところへ行かなかったので、正尊が都へ着たことを聞いた義経は、弁慶に「何とて御伺に來ないかと」迎えにやります。

弁慶に連れてこられた正尊に義経は『いかに土佐坊珍しや、さて何のために上りてぞあるぞ、鎌倉殿より御文はなきか』と尋ねますが正尊は「さん候差したる御事も御座なく候間、御文は参らず候、言葉に申せと候ひしは、都に別の子細なく候こと、偏ひとへに御渡り候ゆえ

と思し召し候、構へてよく守護させ給へとこそ御錠候ひつれ」義経「よもさはあらず、義経討ちに上りたる御使いとこそ覚えたれ」弁慶「大名どもを差し上せられ候はゞ、宇治瀬田の橋をも引き、都鄙とび

※都會―ここ
では京都

の騒ぎとなつては悪しかりなと思し召し土佐坊上つて物詣でする様にて、^{※たば}誰か[※]つて討ち申せとこそ仰せ候ひつらめ』と正尊を詰問します。

そこで正尊は嘘でない証拠に起請文を書きます。

判官は磯の禪師^{ぜんじ}の娘の静を寵愛^{ちゆうあい}されていましたが、正尊に酒を薦め^{すす}静に舞いを舞わせた後、正尊を宿所に帰します。

隔でも【只今土佐が宿所を見せに使わし候と頃に】とありますが、

平家物語によると、六波羅の禿^{※かむろ}を三四人土佐坊の宿所を見にやりますが、帰ってきませんので、はした者を再び行かせます。その者は

「禿は門の前で切られており、宿所の中には、弓を張り、矢を負ひ、^{※ものもちで}皆物具し、物詣の気色は見えませんが」と報告しましたそこで義経は太刀を取り、中の門を開かせ寄せてくる土佐坊の軍勢を待ちます。

そこへ土佐坊の軍勢が攻めてきますが、弁慶は『いかに土佐坊確かに^{※そとより}聞け、さても書きつる偽起請の、罰を忽ち与ふべし、いざ一太刀

※あざまむい
て

※神仏に誓い
書く誓紙

※遊女に仕える
少女

と呼ばはれば』と戦いになります。能でこの戦いの様子は見て、大変面白いです。また、謡ではこの起請文を謡うのが非常に難しいとされています。

平家物語では、戦いに破れた土佐坊は鞍馬の奥の僧正ヶ谷へ逃げました。ここは義経の故郷ですから、すぐに捕まり義経の元へ送られます。

平家物語にちよつと面白い話が書かれています。頼朝は土佐坊が討たれた報を聞き、舎弟の範頼に討手に行けと命じますが、辞退します。再度命じられたが、力及ばずと物具して暇を申し出ます頼朝は「和殿も九郎が真似をし給ふなよ」といわれ、その言葉に恐れて物具を脱ぎ起きて、京上りは留まり給ひぬ。全く不忠なき由一日十枚づつの起請を書き、百日に千枚書いて参らせられけれども、叶わずして遂に討たれ給ひけり、とあります。

舟弁慶（判官都落ち）

この後「判官都落ち」ですが、謡では「舟弁慶」という曲になります。

判官は十一月二日、御所へ行き、「義経君の御為に奉公の忠をいたすも、頼朝、郎等共の讒言によって義経を討たんと仕り候ふ間暫し鎮西のほうへ下らばやと存じ候」といっています。このようなことが「舟弁慶」という曲に弁慶が【我が親兄の礼を重んじ給ひ、ひとまず都を御開きあつて、西国へ御下向あり】と言わせている。

平家物語によれば、四日大物の浦より舟にて下られけるが、おりふし西の風烈しく吹きければ、判官の乗り給へる舟は住吉の浦へうち上げられた。判官の都より具せられたりける十余人の女房達をば、皆住吉の浦にて捨て置かれたりければ、こゝやかしこの松ノ下、砂の上に倒れ臥し泣きいたりけるを、住吉の神官これを憐れみ、乗りものを仕立て都へぞ送りける。

西の風忽に烈しう吹けるは、平家の怨靈おんりょうとぞ聞えし。このことが謡曲『舟弁慶』の構想となった。これは謡本にも、そう書かれているし、さらに「義経記」巻四「義経都落ちのこと」には、更に詳しく記されていると書かれている。

謡曲『舟弁慶』は、他の曲と異り「平家の怨靈とぞ聞えし」ということよりの発想で、後シテに平の知盛の亡霊が波間に現われ義経の一行を自分が壇之浦で沈んだと同様に、海に沈めようと斬ってかゝる、これに果敢かかんに切りむすぶ義経を弁慶は押し隔て、打物業にては亡霊相手では叶かなはないと、祈りに祈ると怨靈は遂に祈り退けられ引く潮と共に跡知れずに消え失せる。

前半は、後半に凄壯せいそうさを表わすため、前半では悲哀さを表わそうと平家物語とは違い、舟に乗る前に静との別れとしたのであろう。

ワキの弁慶に『恐れ多き申し事にて候へども、まさしく静かは御供と見え申して候、今の折り節何とやらん似合わぬように御座候へば、

あつぱれこれより御返しあれかしと存じ候』と言わせている。

そして別れの宴を催し、クセの謡で、昔の支那の物語の陶朱公は、

かいけいざん じ

会稽山に呉に大敗した越の王勾踐と長い年月隠れ住み、遂に呉を滅

ぼし、のちに、江湖に舟を浮かべ、悠々自適の生活を送ったという

物語を謡ふ。義経も一時隠れ住み、頼朝の許しを待つという気持ち

を、この物語の例を引いて現わしていると思われる。そして静は泣

く泣く義経と別れる。という哀れさを現わす。

静との別れを惜しみ、今日は波風が荒いから逗留すると云う義経に

※

対して、弁慶は『その上一年渡辺福島を出しとき、以ての外の大風

なりしに、君御舟を出し平家を滅ぼし給ひし事、今以て同じ事ぞか

し、急ぎお舟を出すべし』と舟出する。舞台のワキ座の前へ舟を出

し、義経、弁慶などが乗り込む、初めはのんびりと狂言の船頭との

会話があり、そのうちに波が高くなり、船頭が懸命に舟を漕ぐ、

『あら不思議や海上を見れば、西国にて滅びし平家の一門、各々浮

※屋島に向かうとき

かみ出でたるぞや、かゝる時節を窺ひて、恨みをなすも理なり、
『今更驚くべからず、たとひ悪靈恨みをなすとも、そも何事のある
べきぞ』ここで早笛という、竜神などの出場に用いるさつ⁺爽と急テ
ンボの囃子に乗り平の知盛の亡霊が出てくる。この曲の一番の見せ
所である。この曲に『前後の替』『重き前後の替』という小書があ
り、それぞれこの後シテの出場の仕方が変わってくる。それによっ
てシテの位が重くなる。見て非常に面白い能である。

平家物語では、住吉の浦にうち上げられた義経一行は吉野へいった。
しかし吉野法師に攻められて、奈良へ落ちた。ここでも奈良法師に
攻められまた都へ帰ってきた。それから奥州へ向かい、安宅の関を
越え、奥州の藤原秀衡を頼った。

先に書いた『撰待』はこの道中のことである。

忠 信 ・ 吉野 静 ・ 二人 静

『忠信』の曲の初めに、『さても我が君判官殿は、この吉野を頼み御座候處に、衆徒しやうとの詮議せんぎ変わり、今夜夜討ちすべき事一定の様に申し候』とある。このことを義経が知り、『とにかくに我は夜に入りこの所を開くべし、誰か一人留まり防ぎ矢を射、その後命を全うし、路次ろじにて追いつくべき者やある』という。そして佐藤忠信が選ばれ、忠信は『御意をばいかで背くべき、しかも一人選まれ申し、防ぎ矢仕れとの御錠じやう、弓矢取つての面目なれば、忝はづかうこそ候へとよ、さりながら、我が君を始め奉り、皆人々にお名残りこそ惜しう候へ』と涙をおさへる。後半で義経を召し取ろうと攻めてきた衆徒を相手に、忠信は奮戦し、暗さを頼りに飛鳥の事く走り翔って、義経の向かった都をさして急いだ。

『吉野 静』は、義経が吉野を落ちるところを謡ふが、『忠信』では忠信が防ぎ矢の奮戦をしたとしているが、『吉野 静』では、衆徒の

集まっている所へ出て、十二騎で落ちた義経らを追っかけて討とう
『十二騎と申すとも、世の勢の百騎二百騎にも対ふべし、かやうに
申す都の者、当山を信じ参る上は、いかにも御寺も宿坊も、難なく
おはしませかしと、思へばかやうに申すなり』と衆徒をなだめ静に
舞いを舞わせ、義経らの落ちゆく時間稼ぎの謀計をするという曲で
ある。その舞（クセ）に『そもそも景時が、その讒言の水上を、思
へば渡辺や、ながるゝ水に満潮の、逆艦立てんと浮舟の、梶原が申
し事、よも順義じゆんぎにて候はじ、されば義経は、直すくに治めし三吉野の、
神の誓ひの真あらば、頼朝も聞こし召し、直なされ義経、執節しゅせつの勅を
受け、洛陽の西南はこれ分国となるべし、さあらば当山の、衆徒しゆと悉
く、参洛し焔依湯仰の御袖に、恵みを抱き給ふべし、あなかしこ不
忠なし、給ふな御科みんこは候はじ、但し衆徒中に、なお憤りいふり深うして、
進みて追っかけ給ふとも、その名聞こゆる人々を、討ち止め申さん
な、片岡増尾むしのお驚の尾おさて、忠信は雙なびなき、精兵ぞよ人々に、防ぎ

矢射られ給ふなど、語ればげには衆徒中に、進人こそなかりけれ』と謡い『しづやしづ、賤のお芋環、繰り返し、昔を今に、なす由もがな』と舞う間に、義経は難無く落ちていった。

同じ場面を『忠信』と全く異なる曲趣として現わしている。

『二人静』吾妻鏡では文治元年十一月十七日の条で静御前は吉野山で義経に別れたことゝなっている。大物の浦にて別れた静が、この山に着て、五日逗留し処、衆徒蜂起の由を聞き山伏姿で逐電した。静かに対して執行は同情し勞した。しかし、どうしても鎌倉へ送らねばならぬとあって、折りから上京中の北条時政の元まで差し出した由が記せられている。このようなことを脚色してこの曲が出来たのであらうと言われている。

この曲の中に『判官殿の身内の人は多き中にも、殊に衣川の御最後まで御供申したりし』と義経の最後が、衣川と初めて出てくる。

三吉野の勝手明神の神職が、正月七日の神事にそなえる若菜を摘みに女を葉摘川へ行かせたところ、一人の女が現われ、社家の人に一日経を書き我が跡を弔って下さるようにと、伝言をたのみ、もし疑う人があれば、そのとき私はあなたに憑いて名を明かしまいとうと消えて行く。

その女が帰り、神官に『真しからず候程に、申さじとは思へども』
という、突然『なに真しからずとや、うたてなやさしも頼みしか

ひもなく、真しからずとや』と先の女がとり憑く。そして私はこの山まで御供した静であるという、そして『我か着し舞の装束をば、

勝手の御前に納めしなり』さて舞の衣装は何色ぞ、袴は精好、

『水干な』世を秋の野の花盡くし、これは不思議のことなり

とて、宝蔵を開き見れば、げにげに疑ふ処もなく舞の衣装の候』とその装束を取り出すと、静の霊が現われ、二人で『しづやしづ、賤

のお芋環、繰り返し、昔を今に、なす由もがな』と謡い、舞ふ。

精好織
練糸で織った
絹、地質厚く
緻密で多く袴
に用ひた

『思ひかへせば、いにしへも、恋しくもなし、憂きことの、今も恨
みの衣川、身こそは沈め、名をば沈めぬ、武士の、物事に憂き世の、
習ひなればと思ふばかりぞ山桜、雪に吹きなす、花の松風静が跡を
弔ひ給へ』と消えて行く。

この曲は能の常套手段を避け、静の霊と、その霊が憑いた女と二人
が現れる怪奇さを狙ったと思われる。

義経は衣川で
自害して果て
たとはいへ、
武士としての
名はいつまで
も残している
ことをいう

初瀬はつせ六代ろくだい（卷十二 初瀬六代のこと）

謡曲の『初瀬六代』は乱曲らんきょく（上、中、下）と、三曲（初瀬六代、東国下り、西国下り）が重習おもならいとして、難しい曲とされている。

謡曲は、普通一つの物語を、主役（シテ）脇役（ワキ）合唱部分（地謡）という役割があり、その物語をすゝめてゆくのである。

曲の中には、文章も美しく、節も面白い一節を独吟といって、一人で謡うこともある。乱曲、三曲ともそのようなものであるが、曲の中の一節でなく、そのものが一曲となっている。

大体に於て、平家物語などの曲としての筋書きでなく、その中の一部分を謡ふ。

平家物語の「初瀬六代」では、高尾の聖文ぶんかく覚坊が、小松の三位中将維盛の子息六代御前が鎌倉へ引かれるのを助け戻り、母に引き合わせるという物語である。謡曲の『初瀬六代』の筋書も、同じではあるが、文章は全然異なる。例へば『伝へ聞く孔子は鯉魚りぎよに別れて、

思ひの火を胸に焚き、白居易は子を先立て、枕に残る葉を恨む、これ皆仁義礼智信の祖師、文道の大祖たり』とか、子を失う気持ちをクセの謡で『初瀬の鐘の声、つくづく思へ世の中は、諸行無情の理、假に見ゆる親子の夢幻のときの間と、かねてはかくと思へどもまこと別れになる時は、思ひし心もうち失せて、ただくれくれと堪へかねる、胸の火はこがれて身は消ゆる心のみなり』と良い文章である。

東国下り

これは平盛久が、鎌倉に送られる道中を謡ったもので、『盛久』の曲の中にも、逢坂の関をこえ、瀬田の橋を渡り、熱田八橋、大井川箱根山を越える道中を謡ふが、東国下りでは、その道々の景色を古事を引き修飾を加えてた文章になっている。

西国下り

これは寿永二年の秋、平家が西海へ落ち行くとき、かつての福原の都の荒れ果てゝいる様子などを謡ひ、さらに九州へ落ちて行く道中を謡ひ、曲は『月落^{ツキ}ち鳥啼^{トリ}いて、霜天に満ちて冷しく江村^{こうそん}の漁火もほのかに半夜の鐘の響きは、客の船にや通ふらん蓬窓^{ほうそう}雨滴^{りた}りて知らぬ汐路^{しじ}の楫枕^{かき}、片敷く袖や妻^{しよ}るらん荒磯波の夜の月、沈みし影は帰らず』と終わっている。

乱曲

阿古屋の松

(巻二 阿古屋の松)

平家物語の「阿古屋の松」は、日本は昔三十三箇国にてありしを、中頃六十六箇国には分けられたりなん。出羽陸奥も一国であったが陸奥と出羽に分けられた。實方^{さねかた}中將が、奥州へ流されし時、当国の名所阿古屋の松を見んとて、国のうちを尋ね回ったがむなしく帰る途中、一人の老人に会い、尋ねると

唐詩選、張繼
の楓橋夜泊の
詩より
窓 苔を蔽うた船

陸奥の阿古屋の松に木隠れて

出づべき月の出でもやらぬか

と云う心から、当国の名所阿古屋の松と尋ねたのでございませぬか、その歌は、陸奥と出羽が一つの国であつた頃詠まれた歌で、いまは阿古屋の松は出羽の国です。と教えられ出羽の国へゆき阿古屋の松を見たと言う話がのっている。そこから『阿古屋の松』という謡を作ったのではないだろうか。松の由来、高砂住吉、三保の松原の松と阿古屋の松とはちがひものであると謡っている。

即ち『秦^{しん}の始皇^{しこう}の御^ご爵^{しやく}に、豫^よめ、ほどの木なりとて、異国にも本朝にも、こり木を賞^{しょう}翫^{くわん}す』『高砂住吉^{かうさどしき}辛^か崎^{さき}の富士も東^{あづま}ぞと、三保松原栗原や……あわれ阿古屋の松蔭の名高きや類^{るい}ひなかるらん』と謡っている。

秦^{しん}の始皇^{しこう}帝^{てい}が
風雨^{ふうう}の難^{なん}を松
下に^{した}逃^にげ、そ
の松^{のまつ}を五^ご大^{だい}夫^{ふう}
に封^{ほう}じた故^こ事^じ

あとがき

『春栄』に、『これは武蔵の国の住人、増尾の太郎種直にて候、さても宇治橋の合戦に弓手の肩を射させ、その矢を抜かんと少し傍ら引き退き候間に、弟にて候春栄深入りし、やみやみと生捕られて』とあるので、平家物語には名前さへ出てこない。

色々調べてみたが、観世本にも典拠不明、治承、寿永、承久と三度あった宇治橋の合戦に、本曲にあるような事実ほどの戦記物語にもないと書かれてある。

平家物語より取材された謡曲は、実に三十余曲になる。

源氏物語からの取材も多いと思うが（まだ、平家物語のように読み返してない）これ程ではないと思う。

平家物語であるから当然平家の人々が、中心に書かれてあるから、曲中の主人公も平家の人が多いのは当然であるが、戦物が多く半分以上である。その中で純粋に勝ち戦は屋島一曲である。（木曾も勝

の部に入れて二曲にすぎない）一ノ谷の合戦は、八曲もある。これは若い公達らの討死の哀れさを強く感じた作者の気持ちの現われであらうか。面白いのは、清盛も、頼朝も謡曲の役としては出てこない。義経で主役は屋島一曲である。後はツレとか子方である。

こんなことを考えると、なかなか楽しい。

ちなみに、義経の出てくる曲は、子方で「鞍馬天狗」「熊坂」「烏帽子折」「船弁慶」「安宅」である。ツレは「正尊」「忠信」「撰待」である。

作者別に見ると、ほとんどが世阿弥せあみである。禅竹は忠信、観世小次郎信光は船弁慶、正尊は弥次郎長俊、生田教盛は禅鳳である。

作者別に曲題を分析するとまた変わった面白さがあるだろうが、各人でお考え頂くことにしたい。

朱	醒	宇	光	陽	清	文	仁	淳	嵯									
雀	翻	多	孝	成	和	德	明	和	峨									
延長	延喜	昌泰	寬平	仁	元慶	貞觀	天安	蕭衡	仁壽	嘉祥	承和	天長	弘仁					
(930)	(932)	(930)	(889)	(888)	(888)	(885)	(887)	(885)	(885)	(885)	(884)	(883)	(882)	(882)	(880)			
一	花	円	冷	村														
条	山	融	泉	上														
寬弘	長保	長德	正曆	永祚	永延	寬和	永觀	天元	貞元	天延	天祿	安和	康保	応和	天德	天曆	天承	承平
(101012)	(100995)	(100990)	(100998)	(100998)	(100998)	(100998)	(100998)	(100998)	(100998)	(100998)	(100998)	(100998)	(100998)	(100998)	(100998)	(100998)	(100998)	(100998)
横		白	後	後	後	後	後	後	後	後	後	後	後	後	後	後	後	三
河		河	三条	冷	泉	朱雀	朱雀	朱雀	朱雀	朱雀	朱雀	朱雀	朱雀	朱雀	朱雀	朱雀	朱雀	条
応德	永保	承曆	承保	仁	延久	治曆	泰平	天喜	永承	寬德	長久	長曆	長元	万寿	治安	寬仁	長和	
(10087)	(10088)	(10088)	(10087)	(10087)	(10087)	(10086)	(10086)	(10085)	(10085)	(10084)	(10084)	(10084)	(10083)	(10082)	(10082)	(10082)	(10081)	(10081)
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
8	8	8	7	7	7	6	6	5	5	4	4	4	3	3	2	2	2	2
7	4	1	7	1	1	9	5	8	3	6	4	0	7	8	4	1	7	7

近										崇										鳥									
衛										德										羽									
久安	天養	康治	永治	保延	長承	天承	大治	天治	保安	元永	永久	天永	天仁	嘉承	長治	康和	承徳	永長	嘉保	寛治									
111	111	111	111	111	111	111	111	111	111	111	111	111	111	111	111	111	111	111	111	111									
111	111	111	(114)	111	111	111	111	111	(112)	111	111	111	111	(110)	111	111	111	000	000	000									
544	544	544	444	443	333	332	222	222	221	221	221	221	221	000	000	000	999	999	999	999									
154	154	154	215	215	215	215	215	215	408	408	408	408	408	864	864	864	976	976	976	976									
後鳥羽		安 高 六 二 後白河																											
		徳 倉 条 条																											
鎌倉時代		建久	文治	元暦	壽永	養和	治安	安承	嘉安	仁安	永萬	長寛	応保	永暦	平治	保元	久壽	仁平											
111		111	111	111	111	111	111	111	111	111	111	111	111	111	111	111	111	111	111										
111		111	111	111	111	111	111	111	(110)	111	(110)	111	111	111	111	(110)	111	(110)	111										
998		998	998	888	888	777	777	777	666	666	666	666	666	666	666	555	555	555	555										
905		905	905	521	521	175	175	175	965	965	965	965	965	965	965	965	641	641	641										
四										御仲順										土御門									
条										堀河 恭										徳									
延応	嘉仁	文禎	天福	貞永	寛喜	安貞	嘉祿	元仁	貞応	承久	建保	建暦	承元	建永	元久	建仁	正治												
111	111	111	111	111	111	111	111	111	111	111	111	111	111	111	111	111	111	111	111										
222	222	222	222	(112)	222	222	222	222	222	(122)	(122)	222	222	(121)	222	222	222	222	(118)										
433	433	433	433	333	333	222	222	222	222	222	222	222	222	222	222	222	222	222	222										
098	098	098	098	329	329	754	754	754	754	193	193	193	193	193	193	193	193	193	193										

後土御門										後花園		称光	後小松	室町	後小松				
文										文	嘉	永	正	明	明	康	嘉	至	永
明										安	吉	亨	長	徳	徳	徳	慶	徳	徳
1										1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
4										4	4	4	4	4	4	3	3	3	3
8										8	4	4	4	2	2	1	9	9	8
7										9	4	1	9	8	2	4	2	0	7
後水尾										後陽成		正親町	後奈良	後柏原					
寛永										天正		元龜	永禄	弘治	天文	享禄	大永	永正	文龜
1										1		1	1	1	1	1	1	1	1
6										6		5	5	5	5	5	5	5	5
2										0		9	9	8	3	6	2	6	3
9										3		6	2	6	3	0	8	5	2
桃園										東山		靈元	後西	後光明					明正
延享										貞享		天和	延宝	寛文	万治	明暦	承応	慶安	正保
1										1		1	1	1	1	1	1	1	1
7										6		6	6	6	6	6	6	6	6
4										8		8	8	7	6	6	5	5	4
8										8		4	1	3	3	1	8	5	2

[illegible]

年代表

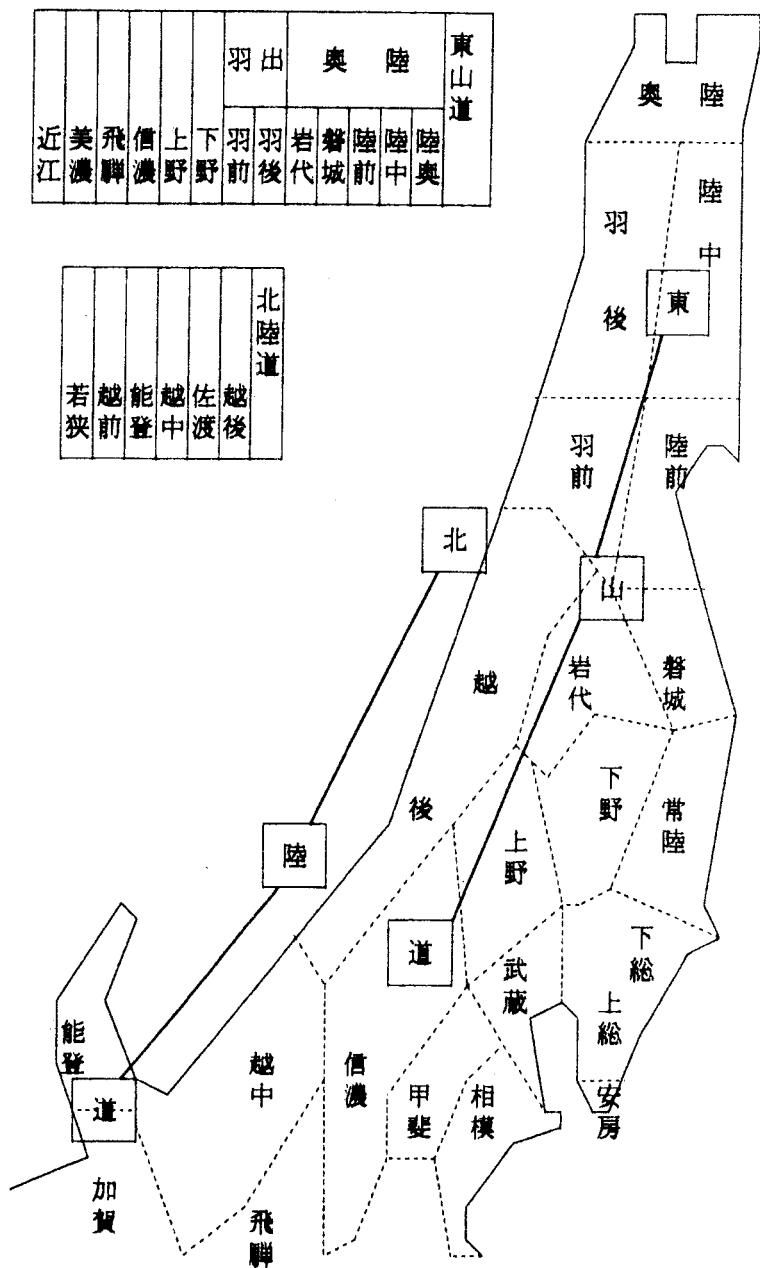
(謡曲に關係するもののみ)

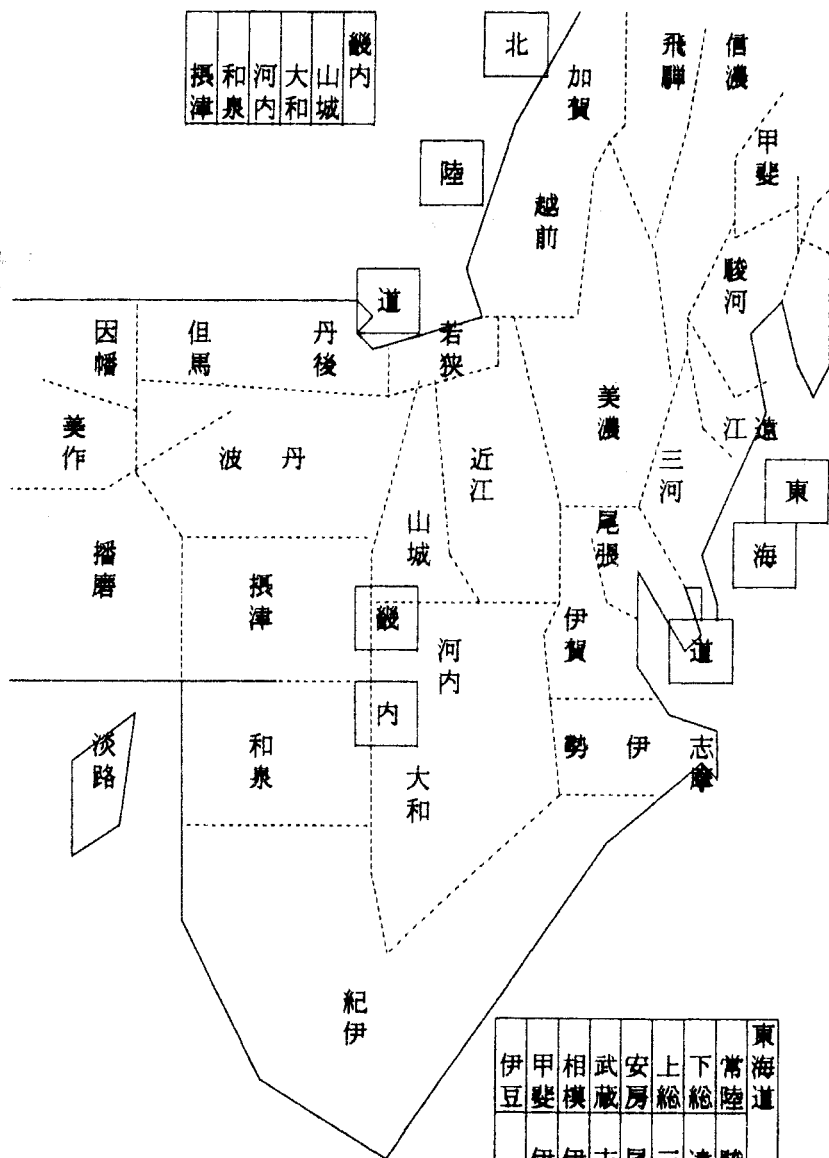
天皇	年号	西歴	月日	事	項	平家物語	謡曲名
二条	平治元	一一五九	十二・二九	義朝の子、朝長自殺			
六条	永應元 仁安元	一一六〇 一一六七	三・二二 二・二二	頼朝伊豆へ流さける 清盛太政大臣従一位になる		わが身の榮華 祇王	祇王
高倉	治承元	一一七七	六月	成経・康頼・俊寛鬼界島に流される		俊寛の沙汰 ほか	仏原
安徳	全二 治承四	一一七八 一一八〇	七・三 四月	大赦により成経・康頼赦免さる 俊寛死す 高倉の宮平氏追討の令旨行家により源氏に伝えられる 頼政宇治で自害		僧都死去 源氏揃へ 橋合戦	俊寛 頼政 鶴 成盛
嵯峨	全全全 養和元 (七月) 寿永二	一一八二 一一八三	八・三三 九・七 十・二〇 四三・四 五・二一 六・一一 七・二五	頼朝石橋山で破れる 義仲信濃で兵を起こす 源平富士川を隔て陣をひく 平軍水鳥の羽音に驚き逃げる 清盛死去 六十四歳		頼朝 倶利伽羅落し 篠原の合戦 主上都落ち	小督 木曾 実盛

天皇	年号	西暦	月日	事項	平家物語	謡曲名
	文治二 全三	一一八六 一一八七	三月二四 五月七 六月九 十一月六	壇之浦の合戦 義経・宗盛等を連れ鎌倉に下る 義経酒匂川に着く 頼朝土佐正尊を京に遣わす 義経大物浦にて嵐に遭い、住 吉の浦に流れつき吉野山へ落 つ 後白河法皇大原に建礼門院を 訪ねる 義経安宅の関に差しかかる	腰越 土佐斬られ 判官都落ち 大原御幸 平家物語には ない	碇潜 正尊 丹井盛 忠信 吉野群 三人群 大原御幸 安宅 初瀬六代

東山道									
		陸奥		出羽					
陸奥	陸中	陸前	磐城	岩代	羽後	羽前	下野	上野	信濃
							飛騨	美濃	近江

北陸道	越後	佐渡	越中	能登	越前	若狹
-----	----	----	----	----	----	----

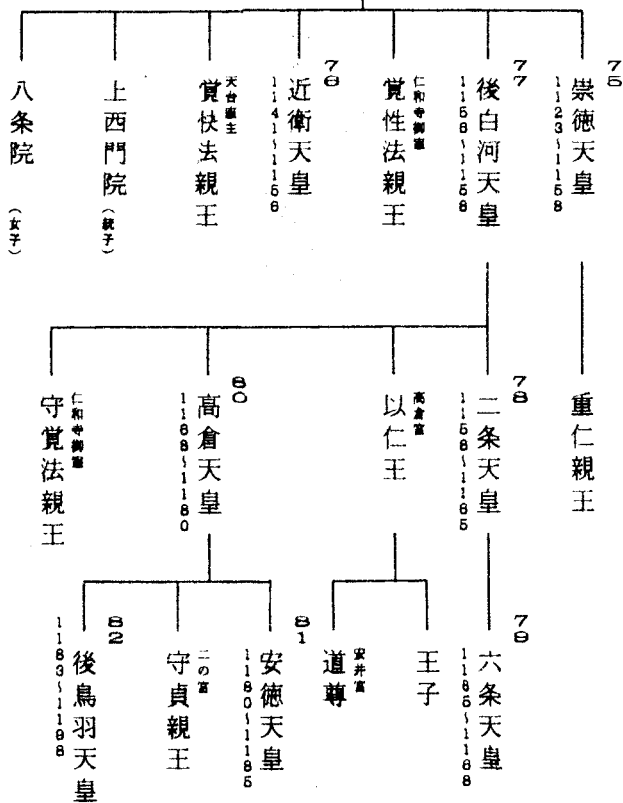




皇室

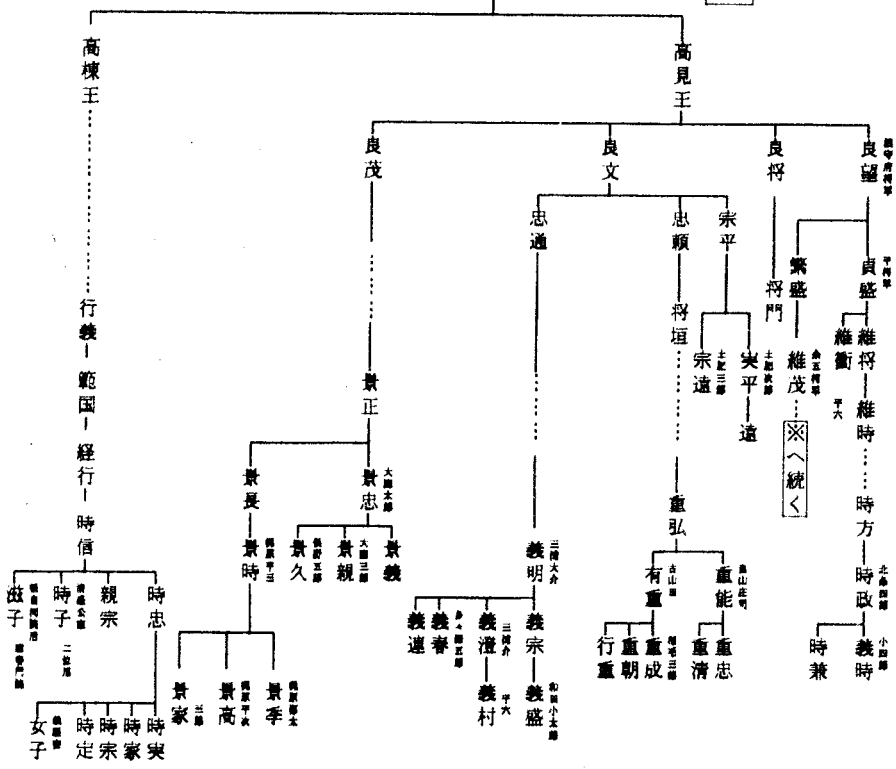
鳥羽天皇

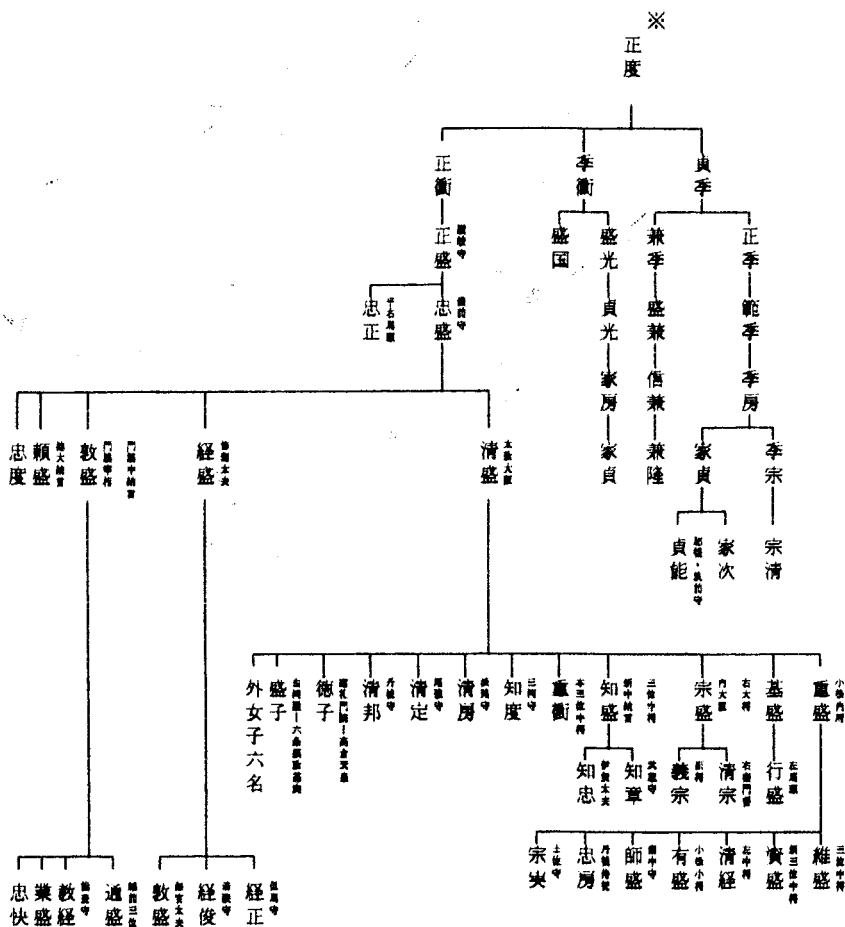
1107511123

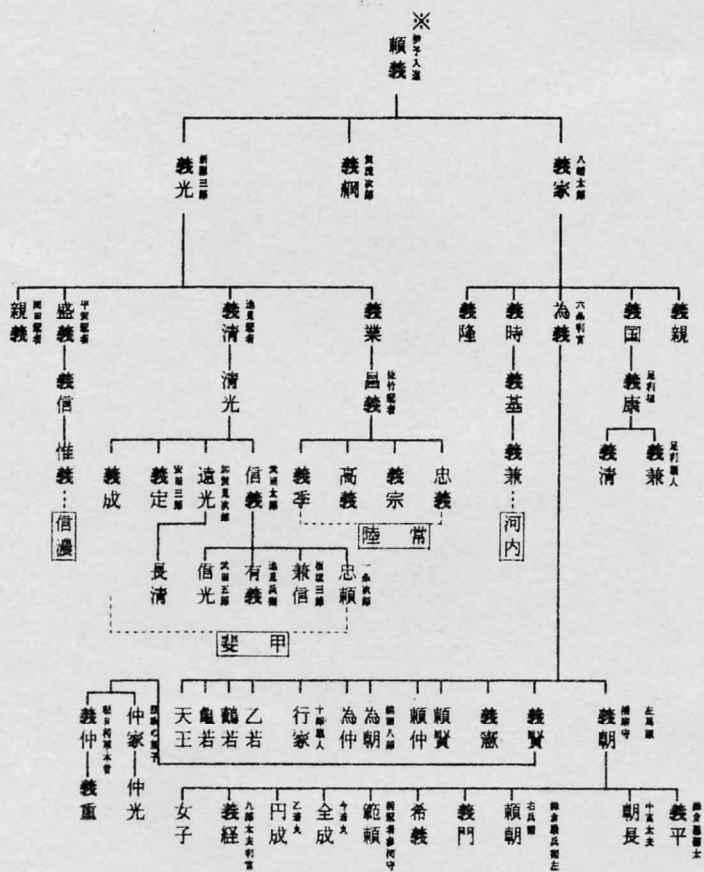


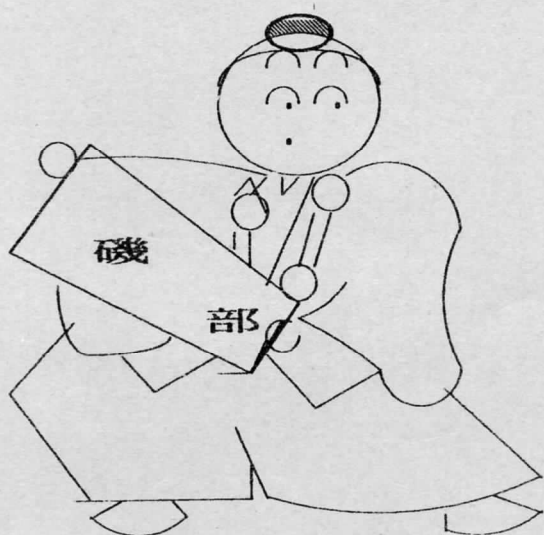
平氏

桓武天皇
葛原親王









平成6年5月1日 磯部武夫著

平家物語と謡曲

限定出版

非売品